

論説

物語の意義と構造(二)

小野坂

弘

目次

I 物語の意義(第二九卷四号)

II 物語の構造

はじめに——ウンベルト・エーコの記号論と物語の構造

一 レヴィ・ストロースとエーコの立場

二 テクスト理論

三 モデル作者とモデル読者

- 四 テクスト共同作業の初期作業
 - 五 言述構造
 - 六 物語構造
 - 七 予想と推考散策
 - 八 世界構造
 - 九 行為項構造とイデオロギー構造
- 第一章 ケネス・バークの劇学と五基語 (Pentad) モデル
 - 一 ケネス・バークの劇学 (Dramatism)
 - 二 「動機の文法」
 - 三 バークの五基語 (Pentad) モデル
 - 四 バークの五基語モデルと物語の構造
 - 第二章 ナラトロジー (Narratology) の物語構造論
 - 一 プロップの『昔話の形態学』と機能論
 - 二 プレモンの物語の論理学 (以上、本号)
 - 三 グレマスの物語記号論 (以下、次号)
 - 四 ジュネットの物語言述の分析

II 物語の構造(二)

はじめに——ウンベルト・エーコの記号論と物語の構造

— レヴィーリストロースとエーコの立場

そもそも「物語の構造」はどのような枠組の中に、どのように位置づけられるのであろうか。私はそのような枠組として、ウンベルト・エーコ(Umberto Eco)の「記号論」(A Theory of Semiotics)を選択する。エーコは著書『物語における読者』において、 \wedge テキスト共同作業の諸レベル \vee の図を掲げる。この図の説明のために「物語における読者」全一冊が書かれたのであるが、極く要約した形で、この図の説明をエーコに従って述べたい。⁽¹⁾まず、以下にその図を再録する。

そもそもエーコはいかなる立場で「物語における読者」を書いたのだろうか。エーコは「開かれた作品」に対するクロード・レヴィーリストロースの発言を批判する。⁽²⁾「あなたのお国の人の特筆すべき著作『開かれた作品』がありますが、それは断じて受け入れることのできないひとつの公式を、まさに擁護しています。作品を作品たらしめているのは、その開かれた存在ではなく、その閉じた存在なのです。ひとつの作品とは、明確な特性を、それも分析が割り出すべき特性を備えた対象であって、この対象は、そのような特性にもとづいて全体的に確定されうるものなのです。ヤコブソンと私がボードレール的一篇のソネットの構造分析を行おうとしたとき、相つぐ時代がその

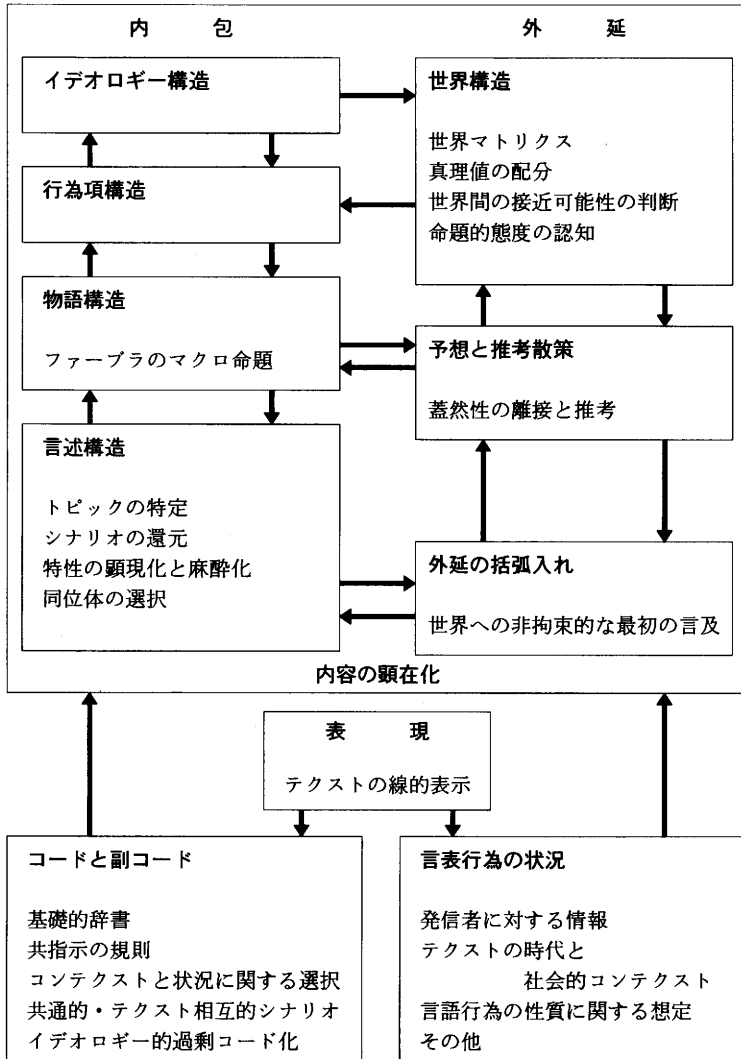


図2 テキスト共同作業の諸レベル

なかに置き入れたものすべてが見出されうる開かれた作品として、それを扱ったのではなく、作者によって一旦創造されるや、いわば結晶のように堅固さをもつ対象として扱ったのです。したがってわれわれの役目は、それらの特性を明らかにすることに限られました」と。エーコの批判の要点は次の言葉に尽きる(もつとも、この批判はレヴィーストローヌにだけ向けられているわけではない)⁽³⁾。「筋の諸要素という伝達のマクロ構造を考察する記号学的「ママ——「記号論的」とすべきである——筆者」研究は、どのような役に立ちうるのだろうか。物語の諸構造を、まったく形式化された組み合わせの中性的諸要素として見る方法があること、そしてその方法が、歴史や社会が作品にさらに付け加える意味の総体を正当化しえないこと、それをわれわれは十分よく知っている。そのような場合、付加される意味や言表としての作品の実用論的諸結果は、つねに偶然的な変奏にとどまり、このような変奏は、作品をその構造規則において損ないはせず、あるいは構造規則によって決定されさえする。……他方では、記号表現の形式を、すでにそれに意味付与を行うことなく、規定しようとする努力はすべて、むなしく、欺瞞的であること、そしてそれは、あらゆる絶対的形式主義が偽装した内容主義にはかならないのと同様であることも、われわれは知っている。形式的構造を孤立させることは、その構造を、作品の方向について先取りされた総体的仮定に対して、関与的であると認めることである。記号表現の関与的諸側面の分析で、すでに解釈を、それゆえ意味の充填を含まないものはない」と。

二 テキスト理論

エーコは本書では、もっぱら書かれたテキストだけを扱う。それも物語テキストに焦点を合わせている。それは

「物語テキストがより複雑で、記号論的により多くの問題を孕み、したがってずっと『異教的』であるからだ。他方、あまりに多くのテキスト理論が、あまりに些細なテキスト部分についての分析を満載しているので、もっと大きな部分に即して、いくつかの理論原則を検証してみるだけの値打はあるだろう。短いテキストについての研究が、生成計算の可能性を確立しようとする形式化された理論を仕上げるのに役に立つことは、明らかだ。しかし本書の目的は別にあり、逆の道を試みるほうが有益だろう」(一一一頁)からである。

ところで「テキスト理論」とは「筋の分析(ならびに詩的言語の分析)に際して『文を越えた』言語学を開発する必要が認識され、その結果、巨視的単位としてのテキストの概念が記号論によって認められるようになった。この単位は特定の生成規則によって支配され、ここでは基本的な記号論的単位としての『記号』という概念そのもの時には事実上廃棄されてしまうことにもなる」と説明されている。⁽⁴⁾つまり、第一世代のテキスト理論と第二世代のテキスト理論の双方とも「テキスト特性が存在し、それらの特性というものは、文の特性ではありえないことを、示したのである。二つの理論はともに、テキストの解釈は(主にとりかかるといってよい)実用論的要因によるものであって、それゆえ、純粹に統辞論的で意味論的な基礎に立って機能する文の文法にもとづいて、ひとつのテキストを相手にするわけにはいかないことを認めている」(二五頁)。第二世代のテキスト理論はしかし、「同時に、孤立した諸項の意味論的分析の諸成果を放棄するつもりもない。反対に第二世代の理論は、孤立した諸項をテキストに向けられた指針の体系として分析する、意味論的分析を構築(ないし要請)しようとする。そうするために、このような理論は明らかに、辞書的かたちでの分析から百科辞典ないしはシソーラス的かたちでの分析へと移行しなければならぬのである」(二七頁)。「すでに『記号論』(二・一一)で提示したとおり、百科辞典的かたちでの

成分分析は、コンテキストに関する選択をも状況に関する選択をも考慮するがゆえに、基本的にテキストへと向けられている」(二八頁)。グレマスが主張するところに、△漁師▽のような所与の意味単位は、それ自身の意味構造において潜在的な物語的プログラムである(三三頁)。テキストの顕在化に向けられた意味論において「意義素は潜在的なテキストとして現れねばならないし、ひとつのテキストとは、ひとつの意義素の拡張でしかない(実際には、ひとつのテキストとは多くの意義素が拡張された結果であるが、テキストは単一の中心的意義素の拡張に還元できると想定したほうが、理論的には生産的である。すなわち、漁師の物語は、理想的な百科辞典なら漁師について語りえたはずの、すべてのことを拡張することしかない)」。……百科辞典的能力についてのこのような十分に包括的な概念が、いったん想定されると、百科辞典的情報の構造化された集合としての、総体的意味体系は理論的には、非常に抽象的なもの、理論的要請、分析の統制的仮説となるということ。総体的意味体系は理論的には、テキストとしての実現に先行するが、実際には、所与のテキスト部分を解釈しようとする具体的な時点でのみ、それは構成され、活性化され、一部は要請されうるのだ。テキストは無数の記号過程の潜在的な場であらかじめ定められたもろもろの意味単位の、ゲーム|| 戯れの結果であるが、無限の記号過程は、ある所与のテキストないしテキスト群とかかわるときにのみ、その部分的記述に還元されうるのである」と(四一頁)。(7)

三 モデル作者とモデル読者

(一)「……テキストは他のタイプの表現から、それがより複雑であるという理由で区別される。その複雑さの主要な動機となるのは、まさにそれが言われていないことを織り込まれているからだ。」「言われていない」とは表

層において表現のレベルで表示されていないことを意味する。しかしまさにこの言われていないことこそ、内容の顕在化のレベルで顕在化されねばならないものだ。そしてこの点でテキストは、他のどのようなメッセージよりも決然と、読者の側の能動的で意識的な共同作業の動きを要求する」(八一頁)。「……テキストには充填されるべき空白箇所、隙間が織り込まれていて、テキストの発信者はそれらの空白箇所や隙間が埋められることを予想し、それらを二つの理由により空白のままに残したのである。まずなによりもテキストとは怠惰な(あるいは経済的な)装置だからだ。それは受信者によって導入される意味の剰余価値の上に立って生きる。……第二の理由として、テキストは、たとえそれが通常は一義性にみあうだけの余白によって解釈されるのを望むとしても、教育的機能から美的機能に移るにつれて、読者に解釈の主導権をゆだねようとするからである」(八三頁)。

(二) 「受信者の能力はかならずしも発信者の能力ではない」というのが、実用論的法則である。「……言語メッセージを『解説』するためには、言語能力以外に、状況に応じて変化しうる能力、複数の前提を作動させうる能力、特性をおさえつける能力などが必要なのである」(八四―八五頁)。「そのテキスト戦略を組織するために、作者は、彼が用いる表現に内容を付与する、一連の能力(『コードの認識』というよりもっと広い表現)にかかわらねばならない。彼は、自分がかかわる能力の総体が、その読者がかかわるのと同じであると想定しなければならぬのだ。したがって彼は、作者たる自分が考えていたとおりに、テキストの顕在化に共同作業しうるモデル読者を予想するだろう。このモデル読者は、作者が生成においてふるまったのと同じように、解釈においてふるまうものと予想されるだろう」。手段は多い。たとえば、ひとつの国語の選択、ひとつの百科辞典タイプの選択、語彙とスタイルに関する所定の文化遺産の選択など(八七頁)。モデル作者、モデル読者とはテキスト戦略のタイプなのである。「モ

デル読者とは、ひとつのテクストがその潜在的内容を十全に顕在化されるために、充たされるべき幸福の条件、それもテクスト的に確立された条件の集合のことなのだ」(九七—九八頁)。

(三)「……二重の状況に直面することになる。一方で、……テクスト言表行為の主体としての経験的作者は、モデル読者の仮説を打ち出し、それを自らの戦略に変形することで、自ら言表主体としての作者を、同様に『戦略的』にテクスト作業様態として描き出す。しかし他方で、共同作業行為の具体的主体としての経験的読者は、モデル作者の仮説を、まさにテクスト戦略の諸与件から引き出すことで、それを描き出すはずだ。経験的読者が自らのモデル作者について打ち出す仮説は、経験的作者が自らのモデル読者について打ち出す仮説よりも保証されているように思われる。事実、モデル読者は、いまだ現実存在しない何かを要請し、それを一連のテクスト作業として実現しなければならぬ。これに対してモデル作者は、あらかじめ言表行為として確認され、言表としてテクストに現前する何ものかから、典型的なイメージを引き出すのである」(九八頁)。「当然のことながら経験的読者は、モデル読者として自己を実現させるためには、さまざまな『文献学的』義務をもつ。つまり彼は発信者のコードを、できるかぎり近似的によみがえらせる義務をもつのだ」(九九頁)。テクストが表層では示していないが、行為項的構造(つまり、表面的に語られる誰それといった人物の個人史を超えた、テクストの実質的「主体」についての問い)や、経験的発信者についての社会イデオロギー的あるいは精神分析的な性格づけのような、「テクストの完全な顕在化の鍵として読者が想定する深層の意味論的構造」があるし、「モデル作者の選択を決定する際に、言表行為の経験的主体の意図について仮説を打ち出すよう促すことで、言表行為の状況が獲得する重み」もある(一〇〇—一〇一頁)。「選択されるモデル作者に応じて、仮定される言語行為のタイプは変化し、テクストはさまざまなかたち

の共同作業を課しつつ、さまざまな意味をとってしまふ。さらにそれは、まったくまじめな言表をアイロニカルな言表として読もうと決定する場合、あるいはその逆の場合に、「起こることだ」と(一〇三頁)。

四 テキスト共同作業の初期作業

いよいよ、前掲の図に示された△テキスト共同作業▽の説明に取り掛かろう。「テキストは統辞論的―意味論的―実用論的装置」であり、テキストの諸レベルとは理論的概念、メタ・テキスト的図式なのである。多くの矢印はあらゆるレベル・区画が相互に、大幅に飛び越えられ、往来されることを意味する。読みは厳密な意味では位階化されていないから、それは樹木状に、メイン・ストリートを進むものではなく、リゾーム状に進行する(一〇六一〇九頁)。

(一) 線の表示 テキストの語彙的表層を線の表示と呼ぶ(一一二頁)。線の表示から出発しなければならない。「換言すれば、表現として与えられてはじめて、テキストはその顕在化が決定されるのだ。そして記号論的能力の体系(コードおよび副コード)に依拠しつつ、表現に内容を付与すること無くして、テキストは顕在化し始めるわけにはいかない。この体系は、具体的な線の表示の生産そのものに先行する文化体系なのである」(一〇九頁)。

(二) 言表行為の状況 線の表示は言表行為の状況と直接、関係づけられる(一一五頁)。言語による言表行為の場合には、受信者は自ら、発信者に関する情報、言語行為の性質に関する情報、テキストの「ジャンル」に関する仮説、いかなるタイプの百科辞典に依拠すべきかを定めるための空間的・時間的再構成などを決定する(一一五―一六頁)。

(三) 外延の括弧入れ⁽⁹⁾ サールは物語命題は特殊なタイプの主張であつて、話者はただ主張をする「ふりをする」⁽¹⁰⁾と言う。サールはこの「ふりをすること」は話者の意志によって決定されると言うが、テキスト上の手掛かりを規定できない。しかし、われわれは「この決定を言述戦略によって表示するテキスト技巧が存在すると思うのだ。……だからこそ、問題のタイプの言語行為について判断をくだすのに十分なだけの保証が、言述構造のレベルで特定されるまで、最初の外延作業は括弧に入れられるべきなのだ」(一一八頁)。

(四) コードと副コード 「言述構造を顕在化させるため、読者は線の表示を、テキストが書かれる国語によって、さらにはこの国語が文化的伝統をとおして回付する百科辞典的能力によって、提供されるコードおよび副コードの体系と突き合わせる」(一一九頁)。以下に、共同作業の一連の段階を理論的仮説として示そう。

(i) 基礎的辞書 読者は辞書の形態の語彙集に依拠し、表現の基本的意味単位を特定する。この下位レベルで、記号内容の最小限の諸公準、あるいは含意の諸規則が機能する。たとえば、「むかしむかし、あるところに白雪姫という王女さまが住んでいました」という文を読めば、「王女」について統辞論的には単数・女性、意味論的には人間で生命ある√存在ということになる。その他の特性はまだ顕在化されない(一一九―一二〇頁)。

(ii) 共指示の規則 前掲の文の後に「彼女はとても美しかった」と続けば、この「彼女」は最初の文の女性主語を指すと確定できるだろう。このように読者は、少なくとも文のレベルでは、指示的表現と前方照応的表現をすぐに明確化する(一二〇頁)。

(iii) コンテキストと状況とに関する選択 百科辞典的形態のコード・副コード体系がこのことを十分に可能にする。コンテキストに関する選択と共に、われわれはテキスト相互的能力の体系(注2のクリステヴァ「テキストと

しての小説」参照）へと導かれる（二二二頁）。

(iv) 修辭的・様式的な過剰コード化⁽¹⁾ 「この下位レベルで読者は、通常、修辭的伝統に記録されている一連の『成』句（あるいは一般的な類型を具体的に実現する表現）のすべてを、過剰コード化の百科辞典によりながら解説できると言おう。「むかしむかし住んでいました」という表現を読むと、①語られる出来事は歴史的でない、不特定の時代に位置すること、②それらの出来事は「現実」のものとしては理解されるべきでないこと、③発信者は楽しみのための想像上のストーリーを物語ろうとしていること、を確認できる。過剰コード化の規則には、ジャンルの規則も含めよう（二二二—二二三頁）。

(v) 共通シナリオによる推考 現代の人工知能研究の「フレーム」理論（それはゴフマンやベイトソンの「フレーム」理論とは違ったものである）をエーコは「シナリオ」と言い換える。それは「格文法によって表される非常に『百科辞典』的な意義素表記と、過剰コード化の例との、どこか中間に位置するように思われる。……シナリオというのは、まさにそれが困難なテキスト読解の諸問題を実践的に解決しようとして仕上げられたがゆえに、生産的であるように思われるのだ」。新しい状況に出会うと、フレーム・シナリオが記憶の中から選択され、必要に応じて修正される。それは「認知」の基本的要素であり、知覚・言語理解・行動といった基本的認知行為を実現できるようにする（世界）表象である。「シナリオとは常に潜在的なテキストあるいは凝縮されたストーリーなのだ」。たとえば、△カクテル・パーティ▽と△スーパーマーケット▽というシナリオを融合させて、人々は適切に行動できる。「思うに、テキスト理解は関与的シナリオの適用によって広く支配されている」と（二二二—二二五頁）。

(vi) テキスト相互的シナリオによる推考 シナリオには階梯がある。まず第一に最大限のシナリオ、もしくは出来

合いのファーブラ(物語構造)が割り出される。たとえば、シリーズものの探偵小説や同じ機能(プロップの意味での——後述)が再現される民話。これらのシナリオは結局、ジャンルの規則となる(たとえば、TVのヴァラエティ・ショーの編成規則)。第二に、モチーフとしてのシナリオが介入する。たとえば、「迫害される婚約者」タイプのものでは、行為者(誘惑者、婚約者)、行動連鎖(誘惑、奪取、拷問)、状況(暗い城館)など。第三に、状況のシナリオ(たとえば、西部劇でのシエリフと悪漢の決闘)が続く。このシナリオはストーリーの一部の展開を拘束したり、最小限の行為を含蓄するが(たとえば、△台所でパイを投げ合う喧嘩▽ではパイはクリーム・パイで、パイは顔面に命中し、クリームは手で目から取れ、第二のパイが今度は攻撃者に命中する)、さまざまなストーリーの生成を許す。第四に、まったく修辭学的トポス、たとえば、快適な場所の記述態様を規定するシナリオ。「いわゆる『共通』のシナリオは、読者が属する文化の成員の大部分と共有されている通常の百科辞典的能力によって、読者に提供されるもので、概して、実践的行動の規則ともなる」。たとえば、チャーニアクの△傘の開き方▽や△家具や壁の描き方▽のフレーム。「テキスト相互的シナリオは反対に、より抜きの限られた知識に属する修辭的・物語的図式であって、これらの図式を、ある所定の文化の成員がみな、所有しているとは限らないのである」。「事実、多くの映画によって通俗化した△銀行強盗▽というテキスト相互的シナリオは、プロの犯罪者が参照する△銀行強盗のやり方▽という共通シナリオよりも、限られた数の行為、個人、その他もろもろの関係にかかわるものだ」(二二五—二二九頁)。

(iii) イデオロギー的な過剰コード化 イデオロギー体系は過剰コード化の事例であり、百科辞典に属する。「読者は、たとえ意識せずとも、自らの能力の構成部分である個人的なイデオロギー的展望から、テキストに接近する」。「受

信者のイデオロギー的態度が読みのレベルの決定に関与しうる」。たとえば、言表行為の主体についての決定が、解釈者のイデオロギー的傾向によって左右されるのは疑いない。このイデオロギー的決定が、読みのレベルを決定してしまふ（一二九—一三一頁）。

五 言 述 構 造

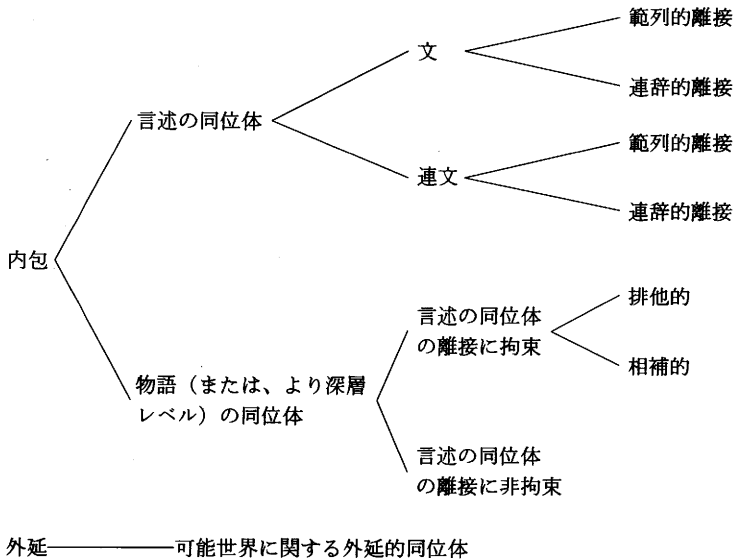
(一) 意味論的明示化 「通常の場合、意義素の諸特性は潜在的なままだ。すなわち、それらは読者の百科辞典に登録されたままであつて、読者は単に、テキストの進行が要求するに依じて、それらを顕在化しよう備えるだけなのだ。つまり、読者は、意味論的に内含まないしは含意されたままであるものうちから、彼に役に立つものだけを明示化する。その際、彼はいくつかの特性を顕現させつつ、他の特性を麻酔にかけるわけだ」（一三四—一三五頁）。

(二) トピック 「トピックの決定は推考の問題、すなわち、パスなら仮説的推論……と呼ぶものの問題だと、教えてくれる。トピックを決定するとは、テキスト的行動のある種の規則性について仮説を出すことを意味するのだ。この種の規則性はまた……テキストの整合性の条件ならびに限界を定めるものでもある」。「文のトピックから言述のトピック、さらには物語のトピック、そしてそれらすべてを包括するマクロ・トピックへと、トピックの位階を確立することができる」。「……トピックが実用論的現象であるのに対して、同位体が意味論的現象であるのは明らかだ。トピックは読者の主導権に左右される仮説である。読者はその仮説を問いかたちで、いくぶん粗っぽく表現し（『いったい何について語っているのか』）、この問いは、続いて仮のタイトルの提案として言い換えられるのだ（『おそらくこれについて語っているのだろうか』）。したがってトピックはメタ・テキスト的な道具であつて、

テキストはそれを前提にすることもできれば、トピックのしるし、すなわち、タイトル、サブ・タイトル、手引き的表現といったかたちのもとに、明示的に含むこともできるのだ。トピックにもとづいて読者は、問題となる語彙素の意味特性を顕現させるか、麻酔にかけるかを決定し、同位体という解釈的整合性のレベルを確立するのである」(一三六—一四三頁)。

(三) 同位体 「グレマスは同位体を『物語の同形的な読みを可能にする冗長な意味範疇の総体』として定義する。そうであるからには、その範疇は文相互ないしはテキストを明確化する機能をもつのだろう……」。多様な同位体について語られているが、以下のようなさまざまな形態がある。

(i) 範列的離接による文の言述同位体⁽¹²⁾ ここでエーコが検討している文は *L'amico dei semplici* || *erborista* (薬草の愛好家 || 薬草採取者) というものである。まず、トピックが読みの仮説として介入する。薬草について語っているのか、



気取りのない人たちについて語っているのか。トピックによって適当なコンテキスト選択がなされ、「問題となるあらゆる語彙素にかかわる解釈的整合性の規則を課したのである。この整合的解釈の意味論的な帰結を、同位体と呼び、顕在化された同位体を、表現の『客観的』な内容として認知することができ（客観的というのは、コードによって裏付けされるという意味で……）」この場合には、*semantic* の複数の語彙からの選択とそれに基づくコンテキスト選択によるから、範列的離接に属する。これらの同位体は、表示義の上では、排他的である（一四五—一四七頁）。

(ii) 連辞的離接による文の言述同位体 *They are flying planes.*（それらは飛ぶ飛行機だ／彼らは飛行機を操縦している）という文を検討する。この場合には、やはり、トピック化によって、飛行機について語っているのか、飛行機を何かする人間について語っているのか、基本的な決定であり、それがコンテキスト選択を決定する。共指示的な決定、つまり、文の統辞的構造にかかわり、*They* が誰あるいは何を指しているかを確定することが、動詞の意味の範列的選択を決める。連辞的離接に属する。これらの同位体も、表示義の上では排他的である（一四七—一四八頁）。

(iii) 範列的離接による連文的な言述同位体 グレマスが上げる小話には、パーティの際に話をする二人の人物が登場する。一人は食べ物、サーヴィス、もてなし、女たちの美しさを褒めあげ、最後に *toilettes* 「装い、あるいはトイレの意味」の素晴らしさを述べる。第二の人物は、自分はまだそこに行っていないと言う。第一の人物は専らパーティや社交性、モードなどに言及しているから、第二の人物の *toilettes* の意味の選択、あるいはコンテキスト選択は間違っている。これは範列的離接に属する。これらの同位体も表示義の上では排他的である（一四八—一四

九頁)。

(iv) 連辭的離接による連文的な言述同位体 「カルロは彼の妻と週に二回する。ルイジも同様にする」という連文の検討。この場合にはまず、トピックの選択によって、二組のカップルなのか、三角関係なのかが決定され(A : B || C : Dなのか、A : B = B : Cなのか)、次に「同様に」について共指示的な決定がなされる。二つの同位体は、連辭的離接に属し、それらは表示義の上で、全く二者択一的ではない(一三八・一四九―一五〇頁)。

(v) 相互に排他的なストーリーを生成させる言述同位体的離接に拘束される物語の同位体 以下に、エーコが掲げるテクスト「それはマッキヤヴェッリからの一部のフランス語訳」の邦訳を示す。「ドミティアヌスは元老院の時代を監視していた。そして彼は、彼が彼の跡を襲うのに好都合な位置にあると見た者をひとり残らず殺した。こうして彼は、彼の跡を襲うはずのネルウアを殺そうとしたのだ。彼の友人で目先の利くひとりが、彼にそれを思いとどまらせた。彼自身があまりに高齢で、その死が間近いと見たからだ。ネルウアが彼の跡を襲ったのは、このようにしてだった」。まず、トピック化はドミティアヌスの時代なのか、ネルウアの時代なのかを決定する。「彼自身」とはドミティアヌスなのか、ネルウアなのかの共指示が決定されねばならない。そして、相互に表示義上で二者択一的な言述同位体が得られる。一つはドミティアヌスの友のストーリー(死と共に、あなたは権力を失う危険をおかす。しかしネルウアを大目に見て、彼をあなたの後継者として暗に示すならば、あなたはたとえ死んでも、権力を支配しつづける)を生成させるし、もう一つはネルウアの友のストーリー(ドミティアヌスよ、何故、あなたはネルウアを殺そうとするのか。あなたはひとりでに死のうとしてゐるのに)を生成させる。異なる行為項構造(つまり、助言者はドミティアヌスの敵対者にしてネルウアの補助者なのか、権力の補助者にしてドミティアヌスの敵

対者なのか、ドミティアヌスの補助者にしてネルウァに対して中立的な者なのか)、イデオロギー的対立(権力対死、あるいは、権力対策略)も見られる。二つの物語の同位体は表示義上、相互に排他的だが、まったく二者択一的ではない(一五〇—一五三頁)。

(vi) 相補的なストーリーを生成させる言述同位体の離接に拘束される物語の同位体 「イスラエルがエジプトをいで、ヤコブの家が異言の民を離れたとき、ユダは主の聖所となり、イスラエルは主の所領となった」〔詩篇一一四・一一四〕

聖書についての中世の理論は、字義の意味(モーゼの時代にイスラエルの民がエジプトを脱出した)と、寓意の意味(キリストによるわれわれの救済)と、道徳的意味(罪の悲哀と悲惨から恩寵状態へと向かう魂の回心)と、天上的意味(墮落の隷属状態から出て永遠なる自由へと向かう、聖なる魂の解放)の四つの意味を認める。この場合には、トピックはまず、表示義的な意味特徴と共示義的な意味特徴の間で選択する。つまり、イスラエルについて語っているのか、魂について語っているのか。前者であるということになれば、イスラエル・エジプトは地名であり、後者であれば、イスラエルは人間の魂であり、エジプトは罪ということにならねばならない。中世の百科辞典においてはイスラエルは選ばれた民を表示義とし、魂を共示義とする。次に、その選択によって物語世界の構造化を方向づけるべく、介入する(一五三—一五五頁)。

(vii) いずれにせよ相補的なストーリーを生成させる言述同位体の離接に拘束されない物語の同位体 グレマスが述べるコンゴウインコについてのポロロ族の神話は、水の探求と食餌療法の二つの話を含む。「言述の統一的な整合性が変化しないことによって、この場合、物語の二つの同位体はたがいに無化しあわず、排他的ないしは二者択一

的な関係ではなく、相補的な関係をもつようになる」(一五六—一五七頁)。

(iii) 外延的同位体⁽¹³⁾ 「A——あなたの舟は実際よりも大きいように思ったよ……」 「B——とんでもない。俺の舟は

実際よりも大きくはないゾ」。Aは自分が以前に思っていた認識世界(ここではBの舟はもつと大きい)と、言明時に実際に経験している世界(ここでは舟は小さい)の二つの世界を作動させているが、Bはこの二つの外延的同位体を区別できないか、あるいは、拒否している。Bにとつては、経験している世界しかない。

(ix) 暫定的な結論 以上見て来たように、同位体は多様な現象をおおう傘形用語なのである。「それは多様性のもとになんらかの統一性が隠されていることを明かす。事実、それでもやはり同位体は、解釈の整合性に従うときのテキストが示す意味の行程の恒常性に関連するのだ。たとえ、言述の、あるいは物語の同位体を特定しようとするのか、所定の記述あるいは文を明確化し、共指示を顕在化しようとするのか、特定の個人がすることを決定しようとするのか、それとも同じ個人の同じ行為がどれだけの異なるストーリーを生じさせるかを確定しようとするのかに依じて、整合性の規則が変化するとしても」(一五七頁)。

六 物語構造

(一) 筋からファアブラへ、そしてファアブラの諸レベル 今日の物語論はロシア・フォルマリストの影響を抜きには語れない。ロシア・フォルマリストは \wedge ファアブラ \vee と \wedge シユジエート \vee を区別する。「ファアブラとは、物語の基本図式、行動の論理、登場人物たちの統辞法、出来事の時間的に秩序づけられた進行のことだ」。「これに対して筋[シユジエート]に対応——筆者」とは、実際に語られるがまま、表層に現れるがままのストーリー、時間的

な移動もあれば、先走りに後戻り、……描写あり、脱線あり、挿話的な考察あり、といったストーリーのこと。ひとつの物語テキストにおいて、筋は言述構造と同一視される。しかしながら筋を、言述構造にもとづいて読者が試みる最初の総合、一連のより分析的なマクロ命題として理解することもできる」。

「さまざまなテキスト理論が、物語のマクロ命題がひとつの総合しか、ないしは言述構造のレベルで表現されるもろもろのミクロ命題を縮約したものしか、構成しないものと見なしている。……大部分の場合、それが当てはまる……としても、物語のマクロ命題が言述のミクロ命題を拡張する多くの状況が存在する」。「第二の考察はフェアブラの分析性ないしは総合性にかかわる。フェアブラの型は、共同作業のかなり自由な主導権にかかっていると云おう」。映画用なのか、マルクス主義研究誌の広告欄用なのかでストーリーの展開が違ふ。「明らかに、フェアブラとは物語の同位体である。すなわち、『神曲』の冒頭部を、罪の『森』からの出口を求める罪ある魂のストーリーとして読むことは、言述構造のレベルで字義的なかたちで現れたものすべてを、意味論的整合性の同じレベルで一貫して読むことを意味するのだ」。「しばしば、フェアブラの型についての決定は、読者のテキスト相互性の能力によっても左右される」。たとえば、『オイディプス王』が「要請するモデル読者は、オイディプスが理解しないことを理解し、オイディプスの知ろうとする意志と知りたくないとする深い欲求との弁証法に、情熱的に参与する読者」なのである。「最後に、物語レベルから行為項構造レベルへの移行するためにも、フェアブラのマクロ命題から出来事の進行についての予想へ移行するためにも、読者は、図……が登録していない相つぐ還元作業をいくつか行わねばならないことを、指摘しておこう」（一六〇—一六五頁）。

(二) 非物語テキストにおける物語構造 図は物語テキストを説明するために考案されたのだが、非物語テクス

トについても機能する。「言い換えれば、ファーブラないし一連の行動は、非物語テクストにおいても、問いや命令、誓いのようなきわめて初歩的な言語行為において、あるいは会話断片においても、顕在化しうるのだ。」「それは、いわば、たとえたいたしたストーリーではないとしても、小さなストーリーだ」(一六五—一六七頁)。

(三) 物語連鎖の基本的諸条件 ヴァン・ダイクは以下の諸条件を、重要で整合的な物語の規定とする。「……物語とは、記述されるそれぞれの行動のために、動作主、動作主の意図、状態ないしは可能世界、変化ならびにその原因、変化を決定する意志を要求する、行動の記述である。さらにこれに精神状態、情緒、状況を付け加えることができるだろう」。記述される行動が困難なもの、思いがけないもの、異常ないしは異様なものでなければならぬという要件は、いつも要請されるには極端に過ぎよう。したがって基本要件を(さらに規定しようとする特殊な物語ジャンルに合わせてのみ他の要件を導入しつつ)、アリストテレスの『詩学』が提案する要件に限っても良いだろう。「……動作主……、当初の状態、時間的に方向づけられ、原因(なんとしても明示する必要はない)によって生じ、最終結果(暫定的あるいは中間的であっても)にいたる一連の変化を、特定すれば十分とされるのだ」と。「……学問的テクストは、単に『言述的組織化』を表示するだけでなく、『物語的組織化』をも表示する。われわれは「……あらゆる論証的テクストを、賭けられ勝ち取られる説得の闘いのストーリーとして、読み直せる」ようになる(一六八—一七二頁)。

七 予想と推考散策

(一) 蓋然性の離接 「それをとおして読者がファーブラを顕在化するマクロ命題は、恣意的な決定に依拠するわ

けではない。それらの命題は、テキストが担うファーストをほとんど顕在化するはずなのだ。生産されたかぎりでのテキストに対するこの『忠実性』の保証は、経験的なテキストをとうしても検証できる意味論的な諸規則によって与えられる。「しかし解釈の作業は時間において行われる。つまり、テキストは一步一步読み進められるのだ。」「確かに、蓋然性の離接は物語のどの時点でも生じうる」し、単なる文の内部でも起こりうる。「……物語テキストは、生起しようとする離接が重要であることを強調するべく、さまざまなタイプのテキストの信号を導入する……。それらの信号をサスペンス信号と呼ぶことにしよう。」「……言述構造レベルでの筋は、ファーストのレベルでモデル読者の期待を用意するべく機能し、しばしば読者の期待は、登場人物の側のしばしば身もたえするような期待の明示的状况を記述することにより、示唆されるのだ」と（一七四—一七七頁）。

(二) 可能世界の予示としての予想 「期待の状態に入るとは、予想することを意味する。モデル読者は、相つぐ諸状態を先取りすることで、ファーストの展開への共同作業を求められるのだ。読者による先取りはファーストの一部となり、その部分は、読者が読もうとする部分に呼応するはずだ。一旦読んだならば、テキストが彼の予想を確認するかどうか、わかるだろう。」「この予想活動は事実、解釈過程全体をつらぬき、他の作業との密接な弁証法をとおしてのみ展開しながらも、その間、言述構造を顕在化する活動によって、絶えず検証されて行く。たとえば、ミラノからシエナに行こうとする時には、 \wedge フイレンツェ \rightarrow テロントラ \rightarrow キウジ \rightarrow シエナ \vee か \wedge フイレンツェ \rightarrow エンポリ \rightarrow シエナ \vee のどちらかを選択することになる。「出来事の二つの進行は、それらが鉄道の網状構造によってそのようなものとして与えられているがゆえに、可能なのだ。」「われわれはただ、物語テキストが関連する百科辞典的能力に照らして、またテキストがあらかじめ仕掛ける手に照らして、蓋然性の離接を予見するのが妥当かどうか

か、自問しなければならぬ。そおしてみると、予想者による命題の形づくるものを『可能世界』と呼ぶのが、もつともよいかもしれない。「当然のことながら読者は、著者と共同作業することを決心していなければならぬ」(二七七—一八三頁)。

(三) 推考散策 いずれにせよ、「テキストが絶えず百科辞典に関係づけられることが、共同作業には不可欠だ」。「仮説を思い切つて立てようとすれば、読者は、共通の、あるいはテキスト相互的なシナリオに依拠しなくてはならない。『通常、こうすればいつでも、他のテキストで起こるとおり、私の経験からすれば、心理学が教えてくれるように……』』といった具合だ。事実、あるシナリオを活性化するとはい……、あるトポスに依拠することを意味する。このようにテキストから外に出る(テキスト相互的な戦利品でいっぱいになってテキストに戻るため)ことを、推考散策と呼ぶことにしよう。さまざまな散策がありうる(一八三—一八六頁)。

(四) 開かれたファープラと閉ざされたファープラ 二つの理論的なタイプが理想化されるが、どちらも完全性に欠ける。「蓋然性の離接のそれぞれにおいて、読者は思い切つてさまざまな仮説を立てることができる」。「ファープラは、その時間軸にそつて顕在化され配置されるにつれて、先取りされたことどもを検証し、それが語ろうとする事態に対応しないことどもを排除する」。閉ざされたファープラの世界は、あるがままのものなのである。これに対して、開かれたファープラは「最後にさまざまな予想可能性を開いてくれ、それぞれの可能性がストーリー全体を(なんらかのテキスト相互的シナリオと協和しつつ)整合的なものとしうるのだ」。二つのファープラで異なるのは、共同作業の強度と生動性である(一八六—一八九頁)。

八 世界構造

(一) 世界構造を語れるか 「……テキスト意味論の観点からする可能世界は、空虚な集合ではなく、充実した集合、……調度つきの世界である。それゆえ、われわれが語るべきは、個物のリストを含まない抽象的タイプの可能世界ではなく、反対に、われわれがその個物も特性も知っているはずの『身重の』世界なのだ。」「文化的世界は調度つきたが、だからといって実体的なわけではない。その世界はタイプライターのように存在するのではなく、『語の意味が存在するのと同じ意味で存在するのである』。『猫』の記号内容を構成する解釈項の織物を表象することが許されるのであれば、何故、△長靴をはいた猫▽が行動する宇宙を構成する、解釈項の織物を表象してはならないのか。結論は以下のようになる。「①可能世界というテキスト記号論的概念を構築することなく、ファープラの諸状態についての予想条件を確立しようとしても、難しいように思われる。②この概念は後で明言するとおり、記号論的な道具と見なされるべきであつて、場合によってはそれが呈する欠陥は、そのせいとされるべきだが、他の同音異義的な諸概念が呈する欠陥は、そうされるべきではない。③可能世界の概念が文学から様相論理学にもたらされたのが事実なら、なぜそれを文学に戻してはいけないのか。④まさに『とてもパリのなドラマ』〔アルフォンス・アレーの短編。三四二―三五〇頁〕のようなストーリー構造を再現しようとするからこそ、可能世界に依拠しないわけにはいかないように思われたのだと」(一九二―二〇〇頁)。

(二) 可能世界とは何か

(i) 予備的定義 命題の集合が表す事物の状態を可能世界と呼ぼう。可能世界は特性を備えた個物の集合から成っている。この特性ないしは述語のうちには行動も含まれるから、可能世界は出来事の進行として見ることもできる。

この出来事の進行は現実的ではなく、まさに可能的であるから、それを主張し、信じ、夢見、決定し、予想するなどの何者かの命題的態度に左右される。プラティンガーによれば、命題の最大限の集合はそれぞれ、なんらかの世界についての書物である。たとえば、 \wedge 赤ずきん \vee のおとぎ話の世界にはわれわれの経験的世界と同じ規則に従うものもあれば、話す狼のように、そのおとぎ話に特殊な特性もある。物語の登場人物も命題的態度を取る(二〇一—二〇二頁)。

(ii) 文化的構成物としての可能世界 \wedge 赤ずきん \vee の物語世界は、ペローによって作られたものである。「赤ずきんは、それを構成するストーリーの枠内では、一連の物理的・精神的(意味論的には『特性』と言われるもの)の凝固物でしかない」。物語世界は、たとえば、人間の言葉を話す狼のように特別の指示がある場合以外では、「現実」世界の特性を借用し、「現実」世界を統制する百科辞典へとわれわれを差し向ける。それは節約ということでもあるが、そればかりではない。どんな物語世界といえども、現実世界から完全には独立できないし、総体的意味宇宙は——絶えず進展することからも——余すところなく記述できない。物語世界における個物および特性は、すでにあらかじめ構成されたものである(二〇三—二〇五頁)。

(iii) 指示的世界の構成 「可能世界への構成主義的なアプローチの枠内で、いわゆる指示的な『現実』世界もまた、文化的構成物として理解されねばならない」。このように主張することは、『現実』世界を觀念論的に無用にしようとするのではない。テキスト共同作業の理論の内部で、明確な作業上の成果を指摘すとすれば、そうする他はないのである。テキスト的可能世界が『現実』世界と重なり合い、テキスト世界が文化的構成物であるということになれば、二つの世界を相互に変換可能なものにするためには、『現実』世界を文化的構成物として扱う、方法的な

必然性が出て来るのである。「それどころか、出来事の可能な進行を、あるがままの事物になぞらえるたびごとに、われわれが実際に、あるがままの事物を、一時的に限定された、この場かぎりの文化的構成物というかたちのもとで、思い描いているのだということを示す、方法的な必要性も出てくるのだ」。中世の人々の百科辞典にとつては「八角獣」は現実の存在であり、彼らは容易にそれを見ることができたであろう。われわれが水を飲むものではなく、それを他の化合物と比較しようとするやいなや、それを構造式に還元すると同様である。言語哲学においては、「現在の」あるいは「現時的」というのは、指標的表現——すなわち人称代名詞や「ここ」と「いま」といった表現のような交換子——でしかないと言われていた」(二〇六—二一〇頁)。

(iv) 「必然的特性」の問題 必然性や本質性というのは、コンテキスト上の比較の問題でしかなく、物語のトピックとの関連でのみ言えることなのである。たとえば、他の人々に見られないためには、閉ざされた幌つきの馬車であることが重要であるが、馬車博物館長にとつては、馬車のすべての特性が重要である。またわれわれは、百科辞典のうちで、百科辞典がすでに上位概念項目のもとに登録していた特性を明示するのを回避するが、これは「含意の経済的規則」である(二二〇—二二八頁)。

(v) 本質的特性の規定 「ある特性の本質性はトピック依存的であり、「問題の世界の最小限の構造がどのようなものでなければならぬかを確立するのは、テキストのトピックなのだ。この構造は全体的で完全ではありえず、(問題の世界について)ひとつの輪郭なり展望なりを表示する」。ひとりの個人が、もうひとつの可能世界の個人と偶然の特性においてしか異ならないとすれば、変異項であり、本質的特性において異なれば、余剰項である。「テキストのトピックが、どのような特性が考慮されるべきかを確立している。他のすべての特性は、否定されないま

でも、作者によって麻酔にかけられるし、読者によって麻酔にかけられうるのだ。「われわれの世界があるがままに受け取るのではなく、指示的世界を構成すること、それはテクスト記号論にとって大きな助けとなるばかりではない。ある命題があたえられても、その可能な論理的帰結のすべてがどのようなもので、どれだけあるかなどとは、まるで自問しない、誰であれ一般の人の頭脳にとつても、大きな助けとなるのだ」(二一九—二二四頁)。

(vi) 同一性 「世界 W_1 」における原型が、世界 W_2 に一つの、それもただ一つの潜在の変異項をもつとき、この潜在の変異項は、複数世界を通じての同一性ないしは世界間同一性と呼ばれるものと一致する」(二二二頁)。

(三) 接近可能性 心理学的解釈を無視すると、 W_1 の構造から、諸個人(個物) および特性間の関係を操作することによって、 W_1 の構造を生成させうるなら、 W_1 は W_1 にとつて接近可能である($W_1:RW_1$)。① $W_1:RW_1$ であるが $W_1:RW_1$ ではない。この関係は二項的ではあるが、対称的ではない。② $W_1:RW_1$ にこつて $W_1:RW_1$ 。この関係は二項的で対称的である。③ $W_1:RW_1$ と $W_1:RW_1$ 。この関係は二項的で推移的である。④先の関係がさらに対称的となる(二二六—二三〇頁)。

(四) 接近可能性と必然的真理 同一律や肯定式のような「論理的に必然的」といわれる真理は、世界マトリックスの構成可能性のメタ言語的な条件、形式的条件である。たとえば、SF小説のタイム・マッシーンは「名指される」だけで、そのような世界は「構成されない」。しかも、たとえば、自然法則(および論理的に必然的な真理)を侵犯できる特性を要請するためには、この法則・真理を受け入れなければならない。最後に、時には隠喩をとうして可能世界の記述が敢行されることがあるが、隠喩とは二つの意味単位が共有する特性に基づくものであるから、それは既に、特性の結合に基づく「構成」の試みなのである(二三〇—二三七頁)。

(五) ファーブラの世界 ①ファーブラにおいて可能世界 W_0 は作者によって確言される世界である。それは時間間隔 $U_1 \dots U_n$ によって整序された、一連の事物状態 $S_1 \dots S_n$ を表す。したがってわれわれは一つのファーブラを一連のテキスト状態 $W_0 U_1 \dots W_n U_n$ として表すだろう。②テキストの進行につれて、いくつかの $W_0 U_1$ 、つまり登場人物の命題的態度の世界が、ファーブラの要素として提示される。それらは後続あるいは先行の状態によって確認される。③テキストの読みの(もしくはファーブラのマクロ命題におけるその相つぐ変容の)進行につれて、一連の W_1 、すなわち、経験的読者により想像される(恐れられ、期待され、欲求されるなどなど)可能世界(それはモデル読者に起こりそうな動きとしてテキストによって予想されている)が——重要な蓋然性の離接において——形づくられる。ファーブラの続く諸状態が、読者の予想の真偽を確認するだろう。④予測運動の進行につれて、読者がファーブラの登場人物の信念などによる可能世界を想像することもありうる。読者が予想しつつ、ある登場人物に帰属させる可能世界を $W_1 U_1$ 、ある登場人物が別の登場人物に帰属させていると読者が想像する可能世界を $W_1 U_1 C$ と呼ぶとすると、読者が $W_1 U_1 C \dots$ タイプの世界を公式化するよう促される、ストーリーが存在する。「床屋の鏡」式ストーリーの状況である(二三七—二四二頁)。

(六) 構造必然的特性と本質的特性

(i) 前述の八(三)の定義に基づいて、①ファーブラにおいて余剰項間の関係は対称的であるのに対し、②変異項と、 W_0 (読者の指示世界)における原型との関係は、対称的ではない。関係が複雑なものであるとき、それは推移的である。「さて、ファーブラの内部でのみ妥当する、これらの二項的で対称的な(そして場合によって推移的な)関係を、構造必然的關係、すなわち、構造上必然的な特性と、呼ぶことにしよう。それらは、ファーブラの余剰個

物の同定に不可欠のものだ」(二四五頁)。

(ii) W₀(物語世界)における余剩個物は、それらの構造必然的特性をとおして同定される。構造必然的特性とは、共テクスト的に相互に緊密に依存し合う、二項的で対称的な関係を表すものである(前述)。それらの特性は、同じ個物に本質的な特性と一致するかもしれないし、一致しないかもしれない。偶然的特性は、ファアラの世界によって厳密に考慮されず、言述構造のレベルでのみ考慮される。すなわち、ある特性が言述構造から物語のマクロ命題への還元作業で生き残るならば、それは構造的に必然的なものとなる。いずれにしても、構造必然的特性と本質的あるいは偶然的特性の二種類の特性は、構造的には依存し合わない(二四七—二四八頁)。

(七) W₀とW₀との接近可能性 指示世界と物語世界との比較に関しては(以下は二四九—二六〇頁)、①読者は指示世界を、ファアラのさまざまな状態に比較し、それらの状態で起こることが本当らしさの基準に呼応するかどうか、理解することができる。そのような場合、読者は問題の諸状態を不動性のうちに封鎖された可能世界としてとらえる(「話をする狼の住む森があるとは、本当らしいだろうか」)。②読者はテクスト世界をさまざまな指示世界に比較することができる。つまり、「神曲」の世界は中世の百科辞典によれば「信じうる」ことであり、現代の百科辞典では伝説上のことと読める。このように真理判定作業もまた、ある種の命題を真として提示されたものと見なすか、偽として提示されたものと見なすかによって行われる。③文学ジャンルに応じて、読者はさまざまな指示世界、すなわち、W₀を構成することができる。歴史小説は歴史的百科辞典に、おとぎ話は精々、共通経験の百科辞典(おとぎ話を享受するのに必要な修正を加えて)に関係づけられる。④物語世界はわれわれの日常的経験世界(つまり、指示世界)にとつて接近可能であるが、その逆は言えない。というのは、物語世界においては構

造必然的特性がその世界の構成的特性として存在しているから、そのような特性を持たない指示世界とは交換できないのである。⑤アリストテレス（『詩学』）が言うように、詩は歴史よりも哲学的だ、何故なら、詩において物事は必然的に起こるのに、歴史においては偶然に起こるからだ。同じように、小説において起こることは、実人生に起こることよりも「真実」だという主張は、芸術作品の意味を理解させる。

(ウ) W_{100} と W_{10} との接近可能性 ソフォクレスの『オイディプス王』において、オイディプスはある段階では、自分が殺した未知の旅人、父王ライオス、ライオスを殺した未知の殺人者の四人がかかわっていたと信じていた（オイディプスの信念の世界 W_{100} ）。しかし、物語は結局、二人（殺人者オイディプスとその犠牲者ライオス）であったことを明らかにする（物語の世界 W_{10} ）。オイディプスは自分の信念の世界 W_{100} を放棄しなければならぬ。「構造必然的関係に関して、 W_{100} と S_{10} が構造上、それを検証するファープラの状態 W_{100} と S_{10} （ S_{10} は W_{10} である）と構造上、同形的であるときは、 W_{100} と S_{10} はファープラに是認され、一つの世界は相互接近可能となる。そうならないときには、登場人物の憶説的世界は否認され、したがって二つの世界は接近不可能となる——物語の心理的あるいは美的効果による事態のあらゆる帰結ともども」（二六一—二六五、特に二六五頁）。

(ウ) W_{10} （読者の予想する世界）と W_{100} との接近可能性 読者が予想する世界は、接近可能性の同じ規則に服する。①読者の予想からなる世界は、それを検証するファープラの状態（それはもっぱら予想に後続する）に比較される。②読者もまた、言述構造の顕在化につれて、ちょっとした部分的な予測を立てることができる。そしてその現象は、登場人物の可能世界にかかわる動きと異なる動きをするわけではない。③読者の描き出す可能世界が構造必然的特性にかかわるとき、その世界はファープラの世界にとって接近可能であり、またその逆も成り立つが、

それはただ、二つの世界間の同形性が検証される場合に限られる。そうでない場合、読者は自分の予想を「放棄」し、ファープラが規定する事象状態を受け入れねばならない。④ここでテキスト総体のメカニズムとファープラのメカニズムを混同しないように、注意しなければならない。テキスト総体は現実世界の一部であつて、精々のところ、可能世界、すなわち、ファープラの可能世界、ファープラの登場人物の可能世界、読者の可能世界を生産する機械なのである。たとえば、フィレンツェから、いずれかの鉄道の路線でシエナまで行けるということは、いまだ可能世界の記述を構成しない。それは、選ぶべき路線、あるいは他人が選ぶかもしれない選んだかもしれない路線について、決定や意見、予想、仮説を形成させうる、現実的構造の記述を構成する。可能世界とは理性的存在者であるが、これに対して鉄道網組織とは、実際に実現されたそのあらゆる結節点を備えた、物質的存在者なのである(二六五—二六七頁)。

九 行為項構造とイデオロギー構造

(一) 行為項構造 ①一旦、物語構造が顕在化されると、読者は行為者の役割(グレマス)もしくは物語機能(プロップ)を特定できる。行為者の役割から個別性を取り去って、それらの役割を行為項的対立(主体/対象、補助者/敵対者、送り手/受け手)へと還元し、ある場合には、単一の行為項が複数の行為者によってカバーされていると、決定することができる。②テキストは繰り延べや飛び越し、先取りや後戻りによって横断されている。読者は一方で、物語のマクロ命題を形成しうるには、ファープラの当の部分における登場人物の役割について、既に仮説を立てていなければならないし、他方では、所与の言述部分が表すのは、起こりつつある事実か、起こった事

実か、想起される事実か、過去において信じられていたが、続く現実によって否認された事実なのかなどなどについて確定するには、フアーブラの諸状態を、それらの論理的連続において認知していなければならぬ。③明らかに、言述構造を顕在化していないのに、可能世界を同定できるわけがない。しかし、言述構造のレベルで動詞時制の何らかの錯綜を解くほぐすには、既に、諸世界についてだけではなく、行為項の骨組と、登場人物がカヴァーする役割とについても、仮説を形成している必要がある。④グレマスが展開した行為項構造のテーマ系は、物語研究以外にも先駆的業績を持つ。たとえば、ケネス・バークの動作主と対抗動作主の概念や、フィルモアの格など。行為項の概念は、百科辞典形式の意味表記の核心そのもののうちに導入される。フアーブラのレベルを超えて形成される（つまり、テキスト形成以前に存在する）行為項仮説は、テキスト共同作業の最初の歩みからして、意味顕在化についての決定を規定している。⑤深層の骨組の構成は、批判的精査の最終結果であり、そのようなものとして、読みのより進んだ（繰り返し行われた）段階で、はじめて現れる（二七〇—二七三頁）。

(二) イデオロギー構造 ①同じことがイデオロギー構造についても言える。ただし、イデオロギー構造は（百科辞典的能力のレベルでも、そのテキストでの顕在化においても）本来の意味でのコードとして（行為項構造の場合の副コードとしてではなく）、言い換えれば相関関係の体系として提示される。もっとはつきり言うなら、価値論的共示義が、テキストに書き込まれた行為項的役割と結びつくときに、イデオロギー構造が現れる。テキストがそのイデオロギーを透かし見せるのは、行為項的骨組が価値判断を付与され、もろもろの役割が善対悪や真対偽（さらには生対死や自然対文化）のような価値論的対立を担うときである。②モデル読者のイデオロギー的能力は、行為項的骨組および大きなイデオロギー的対立の選択を方向づけるのに介入する。テキストは当然のことながら、こ

のような能力をモデル読者に予想し、その能力に働きかけることができる。③イデオロギー的能力は必ずしも解釈への歯止めとして働くわけではなく、刺激としても機能しうる。読者は、作者が自覚しなかったが、テキストが伝えているものを見いだすこともある。(多かれ少なかれ幸福な)「逸脱的」コード解読の場合。

(三) 深層解釈の限界と可能性 ①解釈とは、戦略としてのテキストが、そのモデル読者の共同作業をおして、言おうとしていることを意味論的に顕在化することであると理解されている。その作者の分裂的人格やエディプス・コンプレックスを指摘することは、テキスト共同作業の過程には属さず、テキストを意味論的に顕在化した後の後続過程に属する。②そのように重要で実り多い心理学的、精神医学的、あるいは精神分析的探求は、資料目的でのテキストの使用に属する。③ソフォクレスはフロイ德的過剰コード化の諸帰結を自らの副コードのうちに含む、百科辞典を参照しえないが、ソフォクレスがフロイドを先取りしていたという点で、新たなコードのないし百科辞典的所与を創設しつつあったのだと言えよう(エーコ『記号論』Ⅱ三・六、三・七参照)。このように考えると、フロイ德的読みもテキスト共同作業に属することになる。ただし、経験的主体としてソフォクレスがそれを意識していたか否かは、使用(九三―九五頁参照)の問題であって、共同作業の範囲外である。④『オイディプス王』のモデル読者は、登場人物としてのオイディプスが行う関係認知と同じ作業を、行うように求められる。ある種の物語テキストは登場人物についての物語を語りながら、同時に、そのモデル読者に意味論的―実用論的指針を提示する。つまり、そのストーリーはこのモデル読者について語る。⑤批評の方法は、さまざまである。ここで興味深い相違は、テキスト共同作業と批評の間にあるのではなく、テキスト共同作業の諸態様を語り役立てる批評と、他の目的のために使用する批評との間にある。前者の場合には批評家は共同作業する読者であって、この読者はテキ

トを顕在化した後で、批評を行うのであって、「卓越した」テキスト共同作業の例と規定すべきタイプの批評である(二七五—二八三頁)。

(四) 内包的深層構造と外延的深層構造 ①図の右側には読者が外延的に行う運動が置かれている。どのような個物がかかわってくるのか、どのような世界状態、どのような出来事進行がかかわってくるか、われわれが前にしている主張は、われわれの生きる世界にかかわるものか、それとも可能世界にかかわるものか、またこの世界がどのようなあれ、検証されようとするものについて、どのような予想を立てることができるのか。左側には、読者が内包的に行う運動が置いてある。問題の個物がわれわれの経験世界に存在するかどうかという事実とは独立に、それらの個物にどのような特性を割り当てるか、それらの個物はどのような抽象化を表すのか、それらは良いのか悪いのか、いくつかの個物は同じ役割を果たすのか、などなど。②物語テキストのもろもろの命題が、われわれの経験世界で検証されうる限りでのみ——すなわち、テキストの語るものがみな、いわゆる「現実」世界で起こるかおこった場合)にのみ——意味を持つとすれば、なすべき共同作業はほとんどないだろう。③まさにこういった窮境から脱するために、可能世界の概念が練り上げられ、内包的諸問題を外延的に言い換えようとしたのである。④そうであつてみれば、ある特性が可能世界における個物に妥当すると言ひ、ある命題が可能世界において真実だと言ふこと(外延的に公式化された決定)は、グレマスの構造意味論が内包的レベルで問題にする「真理判定」の問題圏を再提示することを意味する。あるテキストが所与の命題を可能世界(ファープラが描き出す世界や、テキストが登場人物の命題的態度に帰属させる世界)において真なるものとして提示するということは、テキストが何物かを、真あるいは偽なるものとして、虚言あるいは黙止(秘密)あるいは信念の対象として、あるいは信じさせるためか行わせ

るために主張された命題として、提示するべく、言述戦略を顕在化させることを意味する。⑤読者が予想のレベルで出来事の可能な状態をもくろむという事実は、外延的レベルでは、ファーブラの続く展開と整合性があるかどうかによって評価されねばならないし、内包的レベルでは、どのようにしてテキストが当の信念(テキストがファーブラの続く段階で真理値一か〇を当てるはずの)を誘発するために働きかけたのか、問われうるのである。この点で、相互に比較可能な諸世界マトリックスを構成し、個物に特性を割り当てることは、つまり一つの世界内での諸個物の相互連帯性に基づく場合には、行為者に行為的役割を割り当てることと、そんなに違わないように思われる。外延的に真理値を割り当てることもまた、テキストのイデオロギー構造に入れるべきではないか。論理的・論証的ファーブラにもイデオロギー構造は存在するのだから。⑥こういったものも理由によって、世界構造による外延的決定過程(八参照)は、ここで扱った内包的過程と、多くの点で重なり合うように思われる。これらの内包的過程は、おそらく前者の過程の選択肢的変形しか呈しないだろう(二八四—二八六頁)。

第一章 ケネス・バークの劇学と五基語(Pentad)モデル

一 ケネス・バークの劇学(Dramatism)

(一) 物語研究の先駆的業績として、ケネス・バーク(Kenneth Burke)を逸するわけにはいかない。まず、バークの「劇学」とは何か。「バークの書き物がカヴァーする領域の広さはまさに瞳目に値する」⁽¹⁾。しかしここでは、もっぱら「劇学」に焦点をしばって論を進めよう。バークの主張は多くの著作のいろいろな箇所⁽²⁾に散在しており、一箇

所で集中的に論ずるといったやり方ではない。そこでバークの主張の引用の仕方は難しい。「劇学」は術語体系の分析、そして分析に対応して行われるその批判的検討である。そして、この分析と批判の狙いは、人間関係および人間の動機の研究への最短ルートは用語・術語の円環または集合体と、それらの機能の組織的な研究によって手に入る、ということを示すことにある」(『象徴と社会』二二頁)。それはたとえば、アーヴィング・ゴフマン (Erving Goffman) の「ドラマツルギー (Dramaturgy: 演出・演技論)」とどのように違うのか。両者の立場には、それぞれ類似点と相違点とがあるが、決定的な違いの一つは、「ドラマ (Drama: 舞台・劇場・劇・演劇)」はゴフマンにとつては Metaphor (隠喩あるいは広く比喩) であるのに対して、バークにとってはそうではなく、それは人間の資質に内在するものだとということである(ガスフィールド『象徴と社会』六五頁)。ドラマツルギーあるいはドラママティズムに対する批判として、「人生は劇場ではない」と主張される。⁽²⁾この主張も論者によって理由はいろいろであり、ある論者は時間の感じ方と責任のタイプが違ふと言ひ、ある論者は劇場では脚光・注目を浴びているのに対して、日常生活では浴びていないと言ふ。大方の批判者は劇場は「ゴッコ (make-believe)」なのに対して、日常生活は「本当 (real)」であると言ふ。しかし、このような言ひ方は、結局、どのような劇場、どのような日常生活を頭に置いているか次第なのであり、ゴフマンが言うように、「人生は芸術の模倣ではないかもしれないが、普段の行動は、ある意味で、礼儀作法の模倣であり、手本となる形の仕草である。そして、それらの模範の実現は第一に、本当よりはむしろ、ゴッコに属するだろう」⁽³⁾からである。

これと関連して、「ドラマとしての人生」という考え方がある。⁽⁴⁾この主張に対する立場も論者によっていろいろであるが、多くの論者は中間的ないしは折衷的である。ゴフマンも例外ではない。ゴフマンは人間の相互行為をド

ラマであるかのように見ることは役に立つと考える。⁽⁵⁾ 舞台では役者も観客も役者は自分の役柄を演じているだけであることを知っていること、役者は予め筋を知っているが、観客は知らないこと、役者は日常生活の会話と違って間違わず、どもらず、つかえることもなく台詞を言うとして、現実と舞台は違うと言う。⁽⁶⁾ 人生はある時はドラマツルギー的であり、ある時はそうではない。ドラマ的な性質を持たない日常の活動から、意識的に演じられる社会的出来事を通じて劇場の産物に至る連続体があると。⁽⁷⁾

(二) このような折衷的見解に対して、バークは「『全世界は劇場である』といった劇学のプロトタイプともいえる言ひ方は明らかにメタファーである」としながらも、次のように言う。たとえば、物理学者の研究対象である物質に対する関係と、同じ物理学者仲間に対する関係は違う。これら二種類の関係の違いとは、純粹運動と個人の行動の区分である。「この意味で人間は文字どおり、『象徴的行動(シンボリック・アクション)』への特殊な適性によって特徴づけられた動物なのだ。そして、『象徴的行動』というのは『比喩ではなく』文字どおりの意味を表す用語である。そこから『劇(ドラマ)』という語も登場するのだが、それもメタファーとしてではなく、『行為(アクト)』とか『ひと(パースン)』といった語がいったい『本当は何を意味しているのか』をわれわれが見つけだすのを助けるための雛形として用いたい。……」(『象徴と社会』九〇頁。⁽⁸⁾ バークのいう「ドラマ(演劇)」は舞台上の演劇そのものだけでなく、詩、小説のようにさまざまな文芸を囲い込むための一般的用語なのであるが、文学も社会学も「劇学」の実践形式なのである。第一に、両者ともに人間行動の描写の用語としてドラマを使う。第二に、人間の行動・人生は劇場の舞台に劣らずドラマチックなのである。そのような人間を扱う文学・社会学はドラマ性を共有している。「二つの領域は同じ動機の文法、同じ修辞を用い、実用的な面での表現と象徴的な表現とを、二つ

ながら同時にこなしてゆく、という課題を背負っている」(以上、ガスフィールド『象徴と社会』四一・六四・六八頁)。バークの立場は以上のようにまとめることができよう。ゴフマンもバークも観客の存在を意識しており、行為のパフォーマンス性を強調しているが、ゴフマンにとつてのパフォーマンスはあくまで相互行為秩序上のものに止まるのに対して、バークは状況を変質させる手段としてパフォーマンスとしての行為を考える。また、バークは自分の立場を新造語で「ロゴロジー (logology)」(これは「ことばについてのことば」の考察である。参照、『象徴と社会』四五三―四七一頁)と呼び、言葉・用語に焦点を当てるが、ゴフマンは『会話の諸形式 (Forms of Talk)』(一九八三年)はあるが、言語に対する関心は晩年のものである。修辭的行動や象徴的行動についての関心の置き方も違う。

デニス・プリセットとチャールス・エッジリーの次のまとめが適切である。⁽⁹⁾「以上のように、われわれにはそのように思えるのだが、ドラマツルギーをメタファーとして性格づけることは、人間の行動についての人間的分析におけるわれわれの限界を認めることと同様に、ドラマツルギーの重要性を貶めることではない。事実、ドラマツルギーの企画を単純に、ただ、あるいは単に、パースペクティヴあるいはメタファーとして貶めようとする人は、われわれの評価によれば、社会科学を行うことと、何か別のものを行うこととの本質的な類似性を見落としているのである」。何故なら、社会生活についてのすべての知識は必然的に解釈であり、われわれは現実とは何かという問題を放棄して、「いかなる状況の下で、われわれは物事を現実であると考えるか」というもつと管理可能な問題に替えるべきだからである。「ドラマとしての人生」を存在論として主張する人は、「……ドラマツルギーの兎を帽子の中に自分達自身で入れて、その後でそれを引き出して、聞いている人すべてに対して兎の発見を宣言するといった、

あの伝統的な学問的手品の罪を犯すことになる」と。

(三) アラン・ダーシヨビッツは「人生はドラマのような語りではない」と言う。ダーシヨビッツは、チェーホフの劇では第一幕で壁にかけられていた銃は第三幕では使用されると言う。また彼はO・J・シン普森事件の弁護人として、この事件で争われた、妻を虐待した夫がその妻を殺すかという論点を取り上げる。最後に、「事実の発見者、特に陪審員たちは、人生はチェーホフの物語ではないと、警告されよう」と結ぶ。⁽¹⁰⁾

これに対して、ピーター・ブルックスはダーシヨビッツの、人生は物語よりも盲目であり、決まった形のないものであるという主張を一理あると認めながら、ダーシヨビッツの主張を退ける。法は人間と物語能力の不可分性を認めた上で、ダーシヨビッツが主張するような危惧に対処するために、何世紀にもわたって刑事裁判上の証拠法則を展開して来たのであるという、ブルックスの言葉は十分に説得的である。⁽¹¹⁾

二 「動機」の文法

(一) バークは言う。「動機とは状況の速記用語(ショートハンド・ターム)である」と、『象徴と社会』一九九頁⁽¹²⁾。『演劇が栄えた時代には、観客には登場人物たちがなぜそうした振る舞いをするのか、ちゃんとわかっていたものである』。だが、現代のわれわれには劇が繁栄した時代に当然のものとして受け取られていた動機ですらも、よくつかめなくなっている。「こうした文化が統一されている時代にあつては、ひとは自分の動機について嘘をつくことはあつても、自分で自分の動機を知らないなどということは考えられないのである」。「われわれのノマド性、経済的地位の毎年のような変貌、戦争や平和時の繁栄や不景気のもとにおける国家組織の大変動、われわれの職業慣

習の幅広い多様化、世の中がどの方向に向かっているのか、また今から五年後には自分が社会のどの場所にいるのか、など一寸先も見えない状態、おそらく農村地帯を別にすれば、『この父にしてこの子あり』的な態度の完全な消失——こうしたすべてのファクターが、人びとのなかに生じる彼らにとつての典型的で反復的に生じる刺激の個人化に貢献しているのだ』と（以上、『象徴と社会』二〇二—二〇四頁）。

「任意の状況の性格はわれわれが判断に用いる解釈の全体的な枠組みから導きだされるものである。そしてわれわれがある客観的な状況を量り取る方法の相違は、それにどのような動機を割り当てるか、ということによって表現されるわけだ」。「しかしながら、動機の問題はわれわれを伝達の主題へと導かざるをえない。なぜならば、動機は明確にことばの産物だからである。われわれは自分が生まれた文化的共同体が共有する特殊な語彙によつて状況のパターンを知覚する。ことばの産物としてのわれわれの精神は、ある諸関係を有意義なものとして選択する（やはり言語形成物である）諸観念からできあがつている。ほかの共同体では別の諸関係を意味ありとするだろう。これらの諸関係は現実ではない。それらのそれぞれは現実の解釈なのである。つまり、解釈の異なる枠組みが現実の实体についての異なる結論へと導くわけである」と（『象徴と社会』二〇六頁）。

(二) 「人びとは現実の忠実な『反映』であるような語彙を探す。この目的のために彼らは現実の『選択』であるような語彙を發展させなければならぬ」。「……劇学は、ある特定の計算法（つまり現実把握の方法）、もしくは特定の用語系が発達してゆくとときにたどる筋道を明らかにしてくれるであろう。ということは劇学はさまざまに『代表的逸話』の探求を含む、ということの意味する。（ところで、『代表的逸話』というのは、なにも特定の人間の逸話ではなく、代表的な思考の定式につけられた呼び名である。それを逸話と呼ぶのは、代表的人間の逸話が一般の

人間に対し行動の原理として働くように思考の動機づけの機能をもつからである。)つまり、『代表的逸話』は、一連の用語系の語彙が生まれる際に基準となる形式を提供する。「いずれの動機の計算法であれ、それが計算する対象を代表できるためには十分に柔軟で複雑でなければならぬ。それはまた視野の幅をもたなければならぬ。しかし同時にそれが大体において主題の還元であるという点で簡潔でなければならぬ。そして、ドラマをわれわれの代表的あるいは情動的逸話として選ぶことで、われわれはこうした条件を満たすことができるのである。なぜならば、ドラマという形式に準拠して発展する語彙群は組織的に相互関係をもつ構造を所有することになるからで、他方同時にそれは人間界の絵模様を扱い、個性とか行動とかいった典型的に人間的なことで(両語は演じられる『役』という一語のなかに融合できる)文化的表現を位置づけることを可能にするからである」(以上、『象徴と社会』二六一—二六三頁、『動機の文法』八三—八四頁)。

「さて、問題そのものの性質から、定義、つまり組織的な位置づけにおいて、われわれが定義しようとしている「事柄のある特定の観点や特定の基語」〔後述——筆者〕から見ることになるのは避けられないことであるように思える。そして選び出されたさまざまな観点は、それぞれの広がり、視野をもつ『困い込みの円周』をはじめからそのなかに含蓄するのである。「そしてひとはいずれにせよいずれか一つの『困い込みの円周』を選ばなければならぬので……、一見して純粹に経験的な性質をもつと思われる場合においてもすらも、『困い込みの円周』と『困い込みの円周で囲まれたもの……』との間にある『観点を選んだことから生じる(五つ組基語を巻き込むような)諸関係』に注意を配るよう再三勧告されてしかるべきなのだ。」「……ひとはある特定の行為者の場面の性格づけを『大なる種類の『困い込みの円周』のなかから選ばなければならない……。なぜならば人間というものは、自分の生きて

いる時代、その時代における特定の場所に特有な状況になかにいるだけではない。彼はまた、幾世紀にもわたって広がる状況のなかにも同時にいるのであって、彼は「いわゆる人間的な」状況、「普遍的な」状況にいるのである。「ある行為の位置づけのための『囲い込みの円周』の選択はこのようにたいへん幅の広いものであって、それに当面するとき、ひとはまさに人間の自由と必然性の問題に直面するといえよう」。「場面を拡大したり、縮小したりする営みは『言語的位置づけ（リングゲイステイク・プレイスメント）』がもつほかならぬ性質に由来している。そして、この選択の幅からある『囲い込みの円周』を選ぶことそれ自体、一つの行為、一つの『信念にもとづく行為』であり、そこからその行為の性格づけや解釈が生じる」と（以上、『象徴と社会』二六六—二六七・二七六頁。『動機の文法』一〇〇・一〇五—一〇六頁）。

(三)「……動機について十全な陳述が行われるときには、これら五つの問題、何がなされたか（『行為』）、いつ、どこでなされたのか（『場面』）、誰がやったのか（『行為者』）、どのように行ったのか（『媒体』）、そしてなぜやったのか（『意図』）のそれぞれについて、少なくともある種の回答がなされるのである」。「われわれは五つ組の基語が相互間でもちあう純粹に内的な諸問題にメスを入れたい。それらが変形する際のさまざまな可能性、それから、これらの変形によってあらたにつけ加わる新しい関係が、人間の動機についての実際の考察において（説明のための）資源としての程度の有効性を発揮するのを見たい。動機の『文法』というとき、厳密な意味では五つの基語（とその相互関係の基本的な部分）のみを意味するのであって、現実の動機を前にして行われる陳述においてそれらもつ潜在的可能性が果たしてきた役割、果たすであろう可能性については言及されない」。「われわれは、五つの基語のみに関わる『文法』を原論として、現存するもろもろの哲学を、この原論をそのときどきの状況に適用

する「決疑論……」とみなすことができる。「無限の組合せをとりながら展開する基本的な戦略を、そして意識的にまたは無意識的にお互いを出し抜いたり、おだてあげたりするために用いられる戦略の基本構造を私は定式化しようと試みたのだった」。「私はさらにそれ以外の考察もいろいろと行い、それらを「修辭」または「象徴」のいずれかの項目のもとに分類しようと努力したのであるが、結果的には「文法」を構成する素材として区別して扱える道を発見したのだった。というのは執筆の過程で、私の仕事が修辭的もしくは心理的考察よりも論理上優先するような、形式上の考察のなかに基礎づけられる必要があることに気づいたからである」と(以上、「象徴と社会」二一八・二二〇・二二二頁。「動機の文法」一八一—二〇頁)。

三 パークの五基語 (Pentad) モデル

(一) 「いま、ひとが何かやっていると。そして、彼が何をやっているのか、そしてそれをやっている理由を述べなければいけないとする。そのようなとき、どのような要素が説明のなかに含まれてこなければならぬのだろうか」(「象徴と社会」二二七頁。「動機の文法」一七頁)。パークの「動機の文法」はこの問題の解答として書かれたのである。「私は以下に行う研究を成立させるにあたって、いわば母体ともなる大原則として、五つの用語を採用することにしている。それらは「行為 (act)」、「場面 (scene)」、「行為者 (agent)」、「媒体 (agency)」、「意図 (purpose)」の五種類である。人間の動機を十全なかたちで記述しようとするとき、これらのことはが必要になるわけである。まず、思考または行動のかたちをとって生じたもの、すなわち「行為」を描写することは、つぎに、その行為の背景、それが発生した状況を名づけることは、「場面」が必要である。さらにわれわれは、誰が、またはどのような

種類の人間（『行為者』）がその行為を行ったか、どのような方法、もしくは道具（『媒体』）を使用したか、しかもどのような『意図』で行ったか、を指摘することはもたなければならぬ。また動機についての見解の相違は右の五つの用語についての相違でもある。『行為』、『場面』、『行為者』、『媒体』、『意図』。たしかに人間は幾世紀にもわたって自分たちの動機を形成する因子を考察するにあたって、たいへんな積極性と創意とを示してきた。とはいえ、ここに掲げた五つ組の鍵語は一目で理解できるものだし、また動機の考察をたいへんに簡便化できるのである。これら五つ組は最後まで役立つ。なぜなら、（これが簡便なばかりでなく）人間の動機の所在を明らかにするすべての陳述は、五つ組（の認識）から起こり、五つ組（の再認識）によって終わることを明示できるから。五つ組を穿鑿的に調べることで動機の問題を広範囲にわたってカバーできるのであり、また五つ組が手元にあるために、われわれはこの複雑きわまる問題にほとんど奇蹟とも思える理解の容易さ、単純明快さをとりもどし、いつでもあらたな動機の考察へ向かつて再出發できる、というわけである。……五つ組のおかげで、困難のなかで動きがとれなくなりそうになっても、たちまちにくつろいで、われわれがいつもやってきたように日常的な軽い気持ちで、岡目八目のな視線を対象に投げかけることができる。そして、このようにして自信をとりもどしたわれわれは、再出發し、もういちど対象にあえてしばらく解き難く見える状態に留まってもらうことが可能になるのだ」

『象徴と社会』二一八―二一九頁。『動機の文法』一七―一八頁。「……人間は自分で世界を創造することができる。ないかぎり、動機の問題について本質的に謎めいたものがなければならぬ。さらに、この背後に横たわる謎は、動機を表現するための用語の間に生じる不可避的な多義性、矛盾として発現する、という前提である。したがって、われわれが望むものは多義性を回避する用語ではなくて、多義性が必然的に生じるような戦略的個所を明瞭に描き

出す用語、である。「象徴と社会」二二三頁。『動機の文法』二〇—二二頁。

(二)「われわれはこの主題「つまり、『基語』によってわれわれが意味するものの説明——筆者」をやや精確しく考察するつもりでいるのだが、そのまえに、問題の全体をざっと見渡しておくのもよからう。すると以下のような箇条書きの命題のかたちで表現できることがわかる。

『場面』を前面に押し出すとき、それに照応する哲学用語は唯物論の用語となる。

『行為者』を前面に押し出すとき、それに照応する哲学用語は観念論の用語となる。

『媒体』を前面に押し出すとき、それに照応する哲学用語は『プラグマティズム』の用語となる。

『意図』を前面に押し出すとき、それに照応する哲学用語は神秘主義の用語となる。

『行為』を前面に押し出すとき、それに照応する哲学用語はリアリズムの用語となる」と(『動機の文法』一四六—一四七頁)。

(三) 容れるものと、容れられるもの

(i) 五つ組基語間の全比率¹³⁾ 「……五つの基語は一〇組の組合せを許すであろう(それぞれ、場面—行為、場面—行為者、場面—媒体、場面—意図、行為—意図、行為—行為者、行為—媒体、行為者—媒体、そして媒体—意図の組合せである)。比率は term (基語・条件) の決定 (determination) の原理なのだ。「行為と行為者は両者をととも『含む』場面を必要とする。そのために∧場面—行為比率∨と∧場面—行為者比率∨はその十全なる意味において positive (実在的)、つまり positional (位置関係的) なのである。だが行為と行為者との関係はやや違っていい。行為の結果は行為者のなかに『あらかじめ存在していたも同然』であるとはいえ、行為者は行為を場面が含む

ようなやり方では「含まない」。そしてまた、ある特定の行為はそれに照応する気分や性格の特色をかもしだすのも確かだが、行為は行為者の一部を『代喩的に分担している』わけではない。少なくとも私には、△行為―行為者比率▽は、純粹に位置關係的、もしくは幾何学的な關係よりも時間的、または繼起的な關係のほうをより強く暗示する。行為者は彼の行為の創造者（オーサー）であり、彼の行為は彼の子孫だ。……そして逆に、彼の行為はその性格に応じて彼をつくったり、つくかえたりする。彼の行為は彼の生産物であり、またときに応じて彼も自分の行為の生産物なのである」（以上、『象徴と社会』二五二―二五三頁。『動機の文法』四一―四二頁）。

大統領職や法服・僧服の着用の場面と考えると、「通常、△場面―行為者比率▽はこうしたケースをカバーできるまで拡張して応用できる。かくして、大統領職は、それを務める行為者に影響する一つの『状況』として扱えるのだ。僧服の着用も同じように△場面―行為者比率▽の観点でもって扱えるような象徴的な状況を作りだしている」。「△場面―行為比率▽を採用すれば、『状況』がもはや『民主的』状況でなくなるとき、『本質的に民主的な』国民ですらも民主的生きざまを放棄するであろう、という結論になる」（『象徴と社会』二五四―二五五頁。『動機の文法』四二―四三頁）。

『基語比率はしばしば、完全に因果關係を表しているものというよりも、選択の原理として解釈される。なぜなら、いかなる歴史的な状況であれ、さまざまな種類の人間が共存しているのであり、彼らのバラエティーはそれぞれ彼らをもつとも代弁するような種類の行為のバラエティーと照応する、とまず言える。すると、ある特定の政治状況は人びとの基本的な性格を変ええるのではなく、むしろ（適切な行動パターンをもつた）特定の行為者を他者よりも優遇する、もしくは前面に押し出す（『投票で選ぶ』）と言えるのである」（『象徴と社会』二五六―二五七頁。『動

機の文法』(四四頁)。「もちろん五つ組基語には円環現象の可能性がある。もし行為者が、自分の性格にふさわしいやり方で行動するならば(∧行為―行為者比率∨)、彼はそのために場面の性質を変えることがありうるのだ(∧場面―行為比率∨)。そしてそれによって彼と彼をとりまく世界との間に統一を実現する、というわけである(∧場面―行為者比率∨)。あるいは、場面がある特定の種類の行為を要求し、そのことがまたそれに照応する種類の行為者を要求する結果、行為者を場面に類似させるケースもあるうし、逆にわれわれの行為がわれわれ自身とわれわれの場面の双方を変化させ、お互いの調和をつくり出すケースもあるう。だが、これはいわば楽園の構図……と呼ぶべきものであり、かりにわれわれが全体的な変貌を生みだすような行為が可能であったときのみに適応できる方式なのである」(『象徴と社会』二五七―二五八頁)。「動機の文法』(四五頁)。

「容れるもの」と「容れられるもの」との間の関係を考察するのが目的であった本章にいちばんふさわしく、びつたりと内容的にあうのは、例の一〇組の比率のなかにあつて∧場面―行為比率∨と∧場面―行為者比率∨のみである。∧行為―行為者比率∨は問題の周辺部に出没し注目を惹くにとどまる(『象徴と社会』二五九頁)。「動機の文法』(四六頁)。「……『行為者』という基語は、人、演技者、登場人物、個人、主人公、悪役、父親、医師、技師など、行為者一般、もしくは特定の種類の行為者のすべてを覆うだけでなく、『被行為者、受難する者 patient』を表わすすべての機能語、もしくはは精神状態を表現する語(たとえば被害者、『患者』など)、さらには『衝動』、『本能』、『精神状態』といった動機づけ要因や動因を表わすすべての語を覆う、という認識である。われわれはまた、『国民』、『集団』、『フロイトの『超自我』、ルソーの『総意 *volonte generale*』、フイヒテの『一般化された私』のような集合名詞も行為者として扱えるわけだ」と(『象徴と社会』二五九―二六〇頁)。「動機の文法』(四六頁)。

(ii) 場面―行為比率 「場面」ということばを(状況の)舞台装置もしくは背景の意味に用い、「行為」ということばを行動の意味に用いるとき、われわれは「場面は行為を含んでいる」と言えよう。「行為者」を演技者もしくは行為者の意味で用いるとき、「場面は行為者を含む」と言えよう。「いずれにせよ、まず場面と行為との関係をつ調べる際、われわれが例外なしに気づくものは、場面が行為へのふさわしい『容器』であるための原理なのだ。つまり、行動が発展の観点から表現する内容と同じ内容を、場面という固定化された諸性質がそのままそっくり表現しているのにわれわれは気づく」(『象徴と社会』二二二頁。『動機の文法』二九頁)。

パークは△場面―行為比率√の例として、イブセンの『民衆の敵』のストックマン博士とその敵対者である兄ピーター・ストックマン市長を挙げる。ストックマン博士が優勢の時には、博士がストックマン市長を象徴する帽子とステッキをまとい、逆転すると市長が博士から取り上げて身にまとう。また、ストックマン博士が社会の反動的勢力と戦って敗れた場面は、主人公の服は裂け、部屋は散乱し、窓ガラスは破れている。

「動機づけの観点からみれば、一つの場面の性質のなかには、その場面のなかから起こるべき行動の性質が暗々裡に含まれている。これは、行為と場面との間には首尾一貫性があるということへの別の表現である。……暗々裡にあらわにされるのは、今後舞台の上で明晰なかたちをとって展開することになる物語の内容なのだ。あるいは、もし言いたければこうもいえよう。舞台装置は(行動のための基準という点で)『多義的なかたちで』行動を含んでいる、と。そして劇が展開するにつれてこの多義性は、それに照応する『分節的明示性』へと変換される、と。場面と行為の間にある比率は、暗示性と明示性の比率に等しい、といえよう。たしかに舞台装置の細部から、その後起こる演技の細部を推論することはできない。たとえば、表現主義の劇の場合。……さまざまな劇中人物の

間に成立する諸関係という意味での場面を扱うとなると、事態はほけてくる。なぜなら登場人物たちは互いに相互作用を及ぼしあうことで、お互いにとつての人間環境、つまり場面状況として扱いうるから。そしていかなるものにせよあらゆる行為はその後に発生する行為を修正する(それゆえ、ある程度動機づける)文脈の部分として扱われるから。演劇における首尾一貫性の原則は、当然五つ組のなかにおける重複の可能性をわれわれに期待させることになる。だか重複の可能性を意識しつつも、他方ではそれぞれがはつきり識別される場合があることもしつかりと心のなかに刻みつけておく必要がある。われわれは五つ組それぞれ自体が、融合と分離との両方の現象を内在させている用語である以上、われわれはそのなかの二つ(場面と行為)の融合の可能性を認めつつ、両者の分離をここで試みているのである」と(『象徴と社会』一三七—一三八頁。『動機の文法』三二—三三頁)。

(iii) 場面—行為者比率　パークが挙げている例で最も分かり易いのはスウィフトの『ガリバー旅行記』である。その第三巻でラピュータ島民たちが空想的であること——われわれの言葉では「地に足がつかない」性格——を、スウィフトは彼らの鳥が空間に浮かんでいることによつて表現するのである。「……場面と行為者との間の首尾一貫した照応関係についての強烈な印象を伝えるのは(両者を繋げる)技巧だから」、「われわれはここで厳密な意味で場面的な事象を超えて、媒体というわれわれの用語によつてよりよくカバーされる領域へと入つてゆくのだ」。「……もし〱場面—行為者比率〱を厳密に守るならば、『非人間化する』状況はその弁証法的対立物として『非人間化された』人物を含まなければならぬ」。これは自然主義の作家を悩ました問題であった。〱資本主義の劣悪な労働条件〱〱場面と同じ程に獸的な、救うに値しない人間〱。場面について、あまりに狹隘な理解によると、登場人物の個性もしくは役割の狹隘化をもたらすのである(以上、『象徴と社会』二四〇—二四一頁。『動機の文法』

三四—三五頁。

- (iv) これらの比率の追加例 前述したイブセンの劇の△場面—行為比率▽の例は、たとえば、場面の一要素として悪天候を加えることで、場面を環境的に広げることでもできるし、登場人物の顔の表情や身体の所作によって、行為あるいは行為者の方に広げることでもできる（後者は劇作家の指定がない場合に、俳優自身の解釈としても行える）。スウィフトの『ガリバー旅行記』のラビュータ島民の描写（「彼らの頭はみんな右か左かのどちらかか傾いている。彼らの眼は内側に、もう片方の眼は空の方に釘づけされている」）は、△場面—行為者比率▽の例である。また、パークが現実世界の例として挙げているのは、「場面の構成——議長と仲間の委員たちは手摺のなかにいて、席につき、帽子も外套も着ていない——それに対し彼女は手摺の外にいて立っている。また外套を腕にかけ立ち去る用意をしている。彼女は場面が暗々裡に（つまり多義的に）彼女の行為の内容を含むように場面の構成を修正したのだった」と（以上、『象徴と社会』二四三—二四四頁。『動機の文法』三六一—三七頁）。
- (v) 基語比率の遍在 「ほんのわが身の周囲を見まわすだけでも、あらゆるところに△場面—行為者比率▽の例をわれわれは見出す。というのはこの比率こそ動機をめぐって行われるさまざまな憶測・仮説のなかにあつて中心的地位を占めるからである。だがその遍在を認めるためには、われわれは五つ組の基語がさまざまな決疑論のなかでとる、いろいろとりどりの変装をつねに意識していなければならない。」たとえば、『社会』とか『環境』のように明らかに背景的性格をもつ、『場面』のさまざまな同義語を別にしても、われわれはそのほかに時空の指定、つまり特定の場所、状況、時代などを示す語にしばしば遭遇するのだ。「歴史の時代、文化の運動、社会的制度（たとえば『エリザベス朝時代』、『ロマンティズム』、『資本主義』がそうであるが）を表現する用語は場面的用語であ

る。ただししばしば、行為者の用語によってカバーされる領域にも重なる特色もそのなかに混入するのである」。

「**「基盤(グラウンド)」**という語も、形式哲学であろうと動機を論じるときの日常語であろうと頻繁に用いられるが、やはり場面を表す語である。もつともこの語にしても『行為者』や『意図』によって直接カバーされる領域をすぐに侵犯してしまうのだ。『どのような基盤のうえで(Ⅱ)どのような根拠(グラウンド)で』彼はこれをやったのか」という質問を、『このような行為を必要としたのはどのように場面(シーン)であると彼は言っているか』というふうに翻訳するとき、(グラウンド即根拠・意図というふうに反射的に考える習慣から離れて)その場面に気づくことができる。』地の利で作戦が変わる』という金言は△場面―行為比率▽をきわめて厳密なやり方で、特定の場所と結びつけたものである。『地の利』とは、動機を軍事的に測りとする算定法での、『場面』との決疑論的な等位物であり、『作戦』とはそれに照応する『行為』である。政治の解説者は『場面』の同義語として――動機としての意味を明確に意識せずに――『状況』を使い、社会心理学者は『状況』の動機づけの意味合いを意識的に使う。マルクス主義者にとっては「客観的状況」は動機づけの要因である。『……△場面―行為比率▽の適用には二つのやり方がある。それは、ある状況にあつては特定の政策を取る以外道はなかつた、という声明のなかにみられる宿命論的な適用であり、他は、状況に準拠してある特定の政策を取るべきである、といった趣旨の声明にみられる勧告的な適用である』(△場面―行為者比率▽の宿命論的な適用もある)。「劇学的に言えば、行動の基本単位は『意識的もしくは意図的な動きをする肉体』であると規定できよう」。調整とか適応のように、行動にも純粹運動にも使われる用語もある。プロフェッション(知的専門職)、ヴォケーション(天職)、ポリシー(政策)、ストラテジー(戦略)、タクティクス(戦術)、特定の職業を示すティーチャー、ドクターなども行動語である(以上、『象徴と社

会』二四五—二五〇頁。『動機の文法』三七—四〇頁。

四 バークの五組基語モデルと物語の構造

(一) バークの五組基語モデルはガスフィールドが言うように、「これだけを見てみると、△五つ組(ペンタッド)▽はさほど独創的な考えを打ち出しているとは見えないかもしれない。たとえば学校新聞の指導者がニュース記事の見出しや書き出しについて学生に与える注意の域を超えていないようにも思える」。しかし、「こうした『位置づけの方法』を手に入れるための分析装置としてバークが開発した△五つ組▽は学者世界と素人世界とを結びつけ、科学と文学とを結びつける統一的視野を指し示している。劇作家が想像力を発揮して行う創造的な作業といえども、われわれ一般人が行っているものといささかも変わりないのだ」と(ガスフィールド『象徴と社会』二五—二六頁)。プリセットとエッジリイも言うように、バークの五組基語モデルは「誰が、何を、何処で、何時、そしてどのよう(who, what, where, when and how)というより形式的な特性に焦点を向けている」形式主義的なモデルである⁽¹⁴⁾。しかし、ウンベルト・エーコが物語分析について述べているように、「記号表現の関与的諸側面の分析で、すでに解釈を、それゆえ意味の充填を含まないものはない」ことは確かであるが(エーコ『物語における読者』二二頁)、形式的な理論は物語の諸構造を分析する場面では、一定の成果を上げ得るのである。

(二) バークにとって「△劇学(ドラマティズム)▽は術語体系(ターミノロジー)の分析、そして分析に対応して行われるその批判的検討である。そして、この分析と批判の狙いは、人間関係および人間の動機の研究への最短ルートは用語・術語の円環(サイクル)または集合体と、それらの機能の組織的な研究によって手に入る、という

ことを示すことにある」(『象徴と社会』二二一頁)。パークは言語の性質への接近として、科学的接近と劇学的接近の二つを区別する。「これら二つのアプローチ、『科学的アプローチ』と『劇学的アプローチ』(換言すれば、 \wedge 定義づけとしての言語観 \vee と \wedge 行為(アクト)としての言語観 \vee)はけっして相互排他的ではない。いずれのアプローチにも適切な使用方法があるのでこの区分は他を否定するために設けられたものではない。定義それ自体、象徴的行爲(シンボリック・アクト)なのだ」。「しかしながら、出始めの部分では重なり合いは目立つが、しばらくすると二つの道は離ればなれになり、全く異なる種類の観察へとわれわれの注視を導いてゆく。目指す方向の違いをいちばんよくわからせるのはつぎの文句がよからう。すなわち、『科学的アプローチ』は『それは……である、ではない』といった命題にいちばんの強調をおくことばの殿堂を築く。それに対して『劇学的アプローチ』は『汝は……すべし、すべからず』といった訓告・激励的表现にいちばんの強調をおく、というものだ。また、その対極においても両者の区分は判然としたものとなる。科学的アプローチはわれわれがシンボリック・ロジックと結びつけて考える思索となつて結晶するのに対して、劇学的アプローチは物語、演劇、詩、雄弁と広告のレトリック、神話、神学、そして古典的哲学をモデルにした伝統的哲学などのなかに、もつとも便利な素材を見出すような思索において結晶するのだ」。「劇学のことば観は、『象徴的行動』の視点に拠ることで、もつとも感情を離れた科学的術語体系にすら備わっている充分に『勧告的な』性質をめぐつて発動される。われわれはこうした路線に沿つて考察をすすめるのだが、まず言えるのはこうだ。つまり、存在するいかなる術語系も現実の『反映(リフレクション)』である。だが、まさに術語系なるがゆえにそれは現実の『選択(セレクション)』であり、その限りにおいて現実の『偏光歪曲(ディフレクション)』なのだ」と(『象徴と社会』一八〇—一八一頁)。パークは別の所で、「自分の用語の

含むすべての意味合いをとことんまで開発する『用語衝動』といったものが存在する」と言う（『象徴と社会』一九頁）。したがって、パークは基語間の「比率 (ratio)」を問題にするのである。すなわち、基語間のバランスを取るのではなく、いかなる基語を選ぶかによって、事件の性質を決定するのである。

(三) しかしながら、物語の構造を判断する場合には、「比率」ではなく、基語間の結びつきが経験的、概念的、論理的、規範的、そして美的結びつきの諸側面について、証拠に基づいて吟味されることになる。ランス・ベネットとマーサ・フェルドマンは言う。やや長文だが、簡にして要を得ているので引用する。「しかしながら、基本的な訴追は、被告人の行為を、その行為が時間を越えて展開するに連れて、場面・媒介（＝手段）・意図の一貫したセットの中に表現しようと試みなければならない。物語の最低限の構造基準を満足させるためには、行為者と行為とが時間を越えて、場面・意図・手段を通じて結びつけられていなければならない。行為者―場面―行為、行為者―意図―行為、行為者―手段―行為」。「物語における構造的三要素のそれぞれが、法的証明の一つの次元に対応する。第一は行為者と行為が時間と空間に位置づけられる。第二は行為者の意図が確立され、そして第三はその行為の行動メカニズムあるいは執行をカヴァーする。これらの特定の行動用語は、勿論、この事案の証拠が直接的であると想定している。訴追側はまた、状況証拠から引き出した推論に基づいて、これらの要素を確立することもできる。直接証拠の一片も無い事案においては、鍵となる要素が一連の状況から推論されることになる。このような事案においては、行動の諸要素は状況性 (situatedness)・意図・執行から、機会・動機・可能性 (opportunity, motive capability) へと翻訳される。これら全ては、訴追戦略の第一の目標は、証拠を表1に示された法的判断のカテゴリーに対応する物語要素の完全なセットの用語で定義することであると言うことである」。

「言うまでもないことであるが、行為者と行為とがいずれの物語三要素の中でも定義されるやり方は、物語の全ての構造的結びつきを通じて不変に保たねばならない。換言すれば、訴追側の物語はまた、場面・手段・意図を通じて不変の定義を行為者と行為について確立して、そのようにして行為者の行為の一貫して明瞭な解釈をもたらしうように追及しなければならぬのである……」。「訴追側が事案における全ての証拠を考慮に入れた構造的に完全で、内的に一貫した物語を形成するのに成功している程度は、一般的な弁護の物語戦略のそれぞれの成功の見積を決定する。物語の諸要素の全てを一貫した形で定義することに失敗している訴追事案は、一般に、訴追事案の構造的適切性を明快に攻撃する弁護戦略に敗れるであろう。高度に選択的な証拠の導入（あるいは証拠についての問題となる定義）を含む訴追事案は、鍵となる要素を再定義して、そうすることでその物語の曖昧さを論証する弁護戦略に対して脆弱であろう。訴追側がその物語に大量の証拠を組み込むことや、予測することに失敗した（あるいは多くの物語要素の定義が問題である）事案においては、弁護側は自分固有の完全に新しい物語を構成する理由を持っているであろう」と。⁽¹⁵⁾

表1 直接証拠と状況証拠に基づく事案における法的判断のカテゴリーに対応する物語構造の諸要素

法的判断のカテゴリー		
物語構造の諸要素	直接証拠	状況証拠
行為者-場面-行為	状況性	機会
行為者-意図-行為	意図	動機
行為者-手段-行為	執行	可能性

第二章 ナラトロジー (Narratology) の物語構造論⁽¹⁾

(一) 文学理論においてナラトロジーは物語論と訳されているが、これにはいろいろな立場がある。ラマーン・セルデンが言うように、現代の物語論は「ポスト構造主義の理論」や「読者中心の理論」であると言えると思う。しかし、私の関心はあくまでも、裁判の場面での物語の意義、すなわち、事案構成の枠組としての、そして事案判断の枠組としての物語の意義、つまり、物語の一貫性・完全性・納得性にあるから、物語の構造を論ずる諸理論だけをここに取り上げることにする。

まず、用語の問題について述べる。北岡が言うように⁽²⁾、論者の用語は微妙にずれているからである。フランス構造主義はロシア・フォルマリズムから「ファーブラ (fabula)」、「シュジエート (sujet)」の対概念を受け継いだ。仏訳では *histoire/discours*、英訳では *story/discourse (plot)* である。本稿では、物語内容と物語言述と訳すことにする。この用語が導入される前に、エミール・バンヴェニストによって確立されていた *histoire/discours* とは重なり合わない⁽³⁾。ウラジミール・プロップ、ブレモン、グレマス等は物語内容の分析を行い、ジェラルド・ジュネットは物語言述の分析を行っている⁽⁴⁾。「物語記号論」と総括できる立場である。

(二) 具体的な検討に入る前に、ポール・リクールによって、物語記号論の問題意識をまとめておこう⁽⁵⁾。ポール・リクルールの主張については次の章で詳しく検討するが、リクールは物語を歴史物語とフィクション物語に二分する。歴史物語とは歴史学が語る物語のことであるが、リクールは厳密な検討の結果として言う。「何人かの歴史理論家が物語の素朴な技法にとつてかわることができると主張した法則的説明は」「物語的理解にとつて代わることはで

まず、もつと説明することは、もつとよく理解することである、という格言の名において、それは内挿されるだけであり、「さらに、法則的説明が物語的理解にとって代われないのは、前者は後者から、歴史の断乎として歴史的な特質を借用しているからである」と(『時間と物語』Ⅱ五、五七―五八頁)。

物語記号論は、物語機能を歴史から自由なゲームの規則の上に基づけようとする野心を持つ(以下、『時間と物語』Ⅱ五三―五八頁)。それは三つの特徴によって性格づけられる。「第一に、公理のように構成されたモデルに基づいた演繹的手法に、かぎりなく近づくことである」。物語表現のほとんど枚挙できない程の多種多様さ(口誦文字、描画、身振りなど)、物語類別の多様さ(神話、民話、寓話、小説、叙事詩、悲劇、ドラマ、映画、漫画、歴史、絵画、会話など)。「こうした状況は、帰納的アプローチをいっさい実行不可能にし、残るは演繹的な方法のみである」。ロラン・バルトも言う。「物語分析は、どうしても演繹的手続きを余儀なくされる。物語分析は、まず、仮説的な記述モデル(アメリカの言語学者たちの言う「理論」)を考え出し、つぎに、このモデルから出発して徐々に各種の物語のほうへ下つていき、それらがモデルに合致したり離反するのを見なければならぬ。こうした適合と偏差のレベルにおいてはじめて、物語分析は、単一の記述手段をそなえたうえで、物語の複数性、物語の歴史的、地理的、文化的多様性を見出すことになろう」。

第二の特徴は、物語分析への言語学の構造論的原則の拡張である。リクールのまとめによれば、言語学の構造論的原則とは次ぎのようになる。「体系をなしているのはコードであり、ラングである。ラングが体系的であると言ふことは、さらに、ラングの共時相、つまり同時的な相は、その通時相、つまり継起的で歴史的な相からとり出されることができる」と認めることである。ラングの体系的構成について言えば、もしそれを有限な数の基本的な示差

の単位に、つまり体系の諸記号に還元すること、また体系のあらゆる内的関係をうみ出す規則の結合した全体を確定することが可能ならば、その体系の構成は統制され得る。こうした条件のもとでなら、構造は、有限な数の単位間の内的関係の閉じた全体、として定義されることが出来る。関係の内在性、換言すれば、言語外の現実に対して体系は無関係であるというのが、構造を特徴づける閉域の規則からの、重要な論理的帰結である」と。言語学の構造論の原則の適用が最もうまく行ったのは、まず音韻論であり、次に語彙の意味論や統辭論の規則である。ここでもまたバルトを引用する。「認知的な文がいずれもある意味では小さな物語の素描であるのと同様、物語は大きな文なのである。実際、物語にあつては独自の（しばしば非常に複雑な）記号表現をとるとはいえ、物語のなにも、動詞の主要範疇、つまり時制やアスペクトや叙法や人称が、適当に拡大され変形されて見出される。その上、動詞述部に対立する \wedge 主部 \vee そのものも、文のモデルに従わずにはいない。A・J・グレマスによって提出された行為項の類型論「後述」は、物語の大勢の登場人物のうちに、文法的分析に属する基本的諸機能を見出している。ここに示唆した相同性は、単に発見術的価値をもつだけではない。それは言語活動と文学の同一性を含意する」と。⁽⁷⁾

第三の特徴とは、言語学の構造論的特性の統合能力、バンヴェニストの用語によれば、「分布」ではなく、「組み込み」の原理を尊重することである。バルトは言う。「物語を理解するということは、単に物語内容の展開を追うことではない。それはまた、物語に \wedge 階層 \vee を認めることであり、物語の \wedge 筋 \vee の横の連鎖を、暗黙の縦の軸に投影することでもある。物語を読む（聞く）ということは、単にある語から他の語へ移っていくことではない。それはまた、あるレベルから他のレベルへ移っていくことでもある」。バルトは機能 (fonction) レベル（プロップの意味での）、行為 (action) レベル（グレマスの意味での）の他に、物語行為 (narration) レベルの三つの記述レベ

ルを提案するが、展開はしていない。⁽⁸⁾

リクールは言う。「この再構成の試金石となるのは、『無時間的』拘束が、物語機能の伝統性の様式にとって代われるかどうかであろう。ロラン・バルトの言によれば、物語記号論は物語を脱年代順化し、再論理化することに成功したときに、上述の三つの主要な性格がいつそうよく満たされることになる。物語記号論がそれを達成するのは、物語の連辞的(シンタグマ)な相、つまり時間的な相をすべて、それに対応する範列的(パラダイグマ)な相、つまり無時間的な相に従属させることによってであろう」と。

一 「プロップの」『昔話の形態学』と機能論⁽⁹⁾

(一)「私たちがここで意図しているのは、魔法昔話のさまざまな筋をたがいに比較することです。その比較のために、ある特定の方法にしたがって、昔話の構成部分を析出し、その後で、かく分析した構成部分に基づいて、昔話をたがいに比較してゆきます。その結果得られるのが、形態学(モルフオロジー)です。いいかえると、昔話に關し、その構成部分・構成部分相互の關係・構成部分と全体との關係に基づいておこなう記述です」。プロップは例を挙げる。①王が、勇者に、鷲を、与える。鷲は、勇者を、他国へと連れて行く。②老人が、スーチェンコに、馬を与える。馬は、スーチェンコを、他国へ連れて行く(以下、省略)。「ここで引いた例のうちには、定項(コンスタント)と可変項(ヴァリアブル)とがあります。変わる「可変項」は、登場人物たちの呼び名(と、それと共に変わる属性)です。変わることはない「定項」は、登場人物たちの行為です。つまり、機能です。以上のことから出てくる帰結は、昔話は、しばしば、相異なる人物たち「可変項」に、同一の行為「定項」をおこなわせる、と

いうことです。この帰結は、私たちに昔話を、登場人物たちの機能「という定項」に基づいて研究しうる可能性をあたえてくれます」(三三一—三三三頁)。

(二) 次に、プロップは四つの基本テーゼを掲げる(以下、三三一—四〇頁)。第一のテーゼは「昔話の恒常的な不変の要素となっているのは、登場人物たちの機能である。その際、これらの機能が、どの人物によって、また、どのような仕方、で、実現されるかは、関与性をもたない。これらの機能が、昔話の根本的な構成部分である」。機能という用語を、登場人物の行為で、しかも、筋^{II}出来事全体の展開過程にとつて当の行為がもちうる意義「位置」という観点から規定された登場人物の行為、というふうに解することにします。リクールが指摘するように、筋という目的論的統一性を考慮することによって、「民話の内部での機能間の諸関係の純粹に加算的な概念を、あらかじめ修正する」のである(『時間と物語』Ⅱ五九—六〇頁)。第二のテーゼは「魔法昔話に認められた機能の数は、限られている」。第三のテーゼは「機能の継起順序は、常に同一である」。第四のテーゼは「あらゆる魔法昔話が、その構造の点では、単一の類型に属する」。プロップのテーゼは、資料体の中の全ての魔法昔話は、唯一の昔話の変異体にすぎない、その唯一の昔話は類としての機能が継起することによって構成される、魔法昔話なるものであると言う。

(三) プロップは三一の機能を列挙する(第三章四一—一〇二頁)。

(i) 最初の七つの機能を挙げる。I 家族の成員のひとり家が留守にする(定義は「留守」)。II 主人公に禁を課す(「禁止」)。III 禁が破られる(「違反」)。IV 敵対者が探り出そうとする(「探りだし」)。V 犠牲者に関する情報が敵対者に伝わる(「情報漏洩」)。VI 敵対者は、犠牲者となる者なりその持ち物なりを手に入れようとして、

犠牲となる者をだまそうとする(「謀略」)。Ⅶ 犠牲となる者は欺かれ、そのことによって心ならずも敵対者を助ける(「幫助」)(以下、省略)。

(ii) プロップは言う。「昔話は、ふつう、ある種の導入の状況から始まります。……この導入の状況は、機能ではありません。それでも、この状況も、形態学上、重要な要素です」(四二頁)。この点に関してリクールは言う。「どのような要素か。まさに物語を開始する要素である。ところでこの開始は、アリストテレスが『はじまり』と呼ぶものに相当し、一つの全体とみなされる筋に対しては、目的論的にしか定義されない。それだからこそプロップはその開始を、線状的切分化の原則に厳密に属する機能の列挙の中には数え入れなかったのである」(「時間と物語」Ⅱ六二頁)。

(iii) 次に、プロップはⅧ 敵対者が、家族の成員の一人に害を加えるなり損傷を与えるなりする(「加害」と、Ⅷ a 家族の成員のひとりに、何か欠けている、その者が何かを手に入れたいと思う(「欠如」)の二つの機能を挙げる。「この機能は、きわめて重要です。なぜなら、厳密に言えば、この機能によってはじめて、昔話の動きが始まるからです。『留守』も、『禁止／違反』も、『探りだし／情報漏洩』も、『謀略／幫助』も、この『加害』機能の下準備となるものであり、この機能が「成り立ち」うるようにするための、あるいは、単に、この機能を容易にするためのものです。そこで、これら最初の一連の機能は、昔話の予備部分である、と見ることができます。他方、昔話の「真の」発端は『加害行為』によって開かれるものです。『加害行為』の形は、きわめて多種多様です。しかし、決して総ての昔話が、『加害行為』から始まるわけではありません。『加害行為……なる機能から始まる話とまったく同じ展開の仕方を示すことが多いのですが、発端は、違っている話もあります。この現象をよく検討

してみると、それらの話が、なんらかの不足ないし欠如の状態から始まり、「加害行為」があった場合に探索がありますが、それに類した探索が結果として開始される、ということが見て取れます。「ここにいう「欠如」とは、数の系列のなかにおかれて、一定の数値となるゼロになぞらえることができません」と(四八・五四―五五頁)。

(iv) プロップは「昔話の発端を形づくるもの」で、「ここからさらに筋は展開して」ゆく要素として以下を挙げる。IX 被害なり欠如なりが「主人公」に知らされ、主人公に頼むなり命令するなりして主人公を派遣したり出立を許したりする(「仲介」「つなぎの段階」)。X 探索型の主人公が、対抗する行動に出ることに同意するか、対抗する行動に出ることを決意する(「対抗開始」)。XI 主人公が家を後にする(「出立」)。

次に、贈与者が登場して(XII)、呪具の贈与・獲得(XIV)、旅と敵対者との闘いと勝利(XV―XVIII)、そしてXIX 発端の不幸・災いか発端の欠如が解消される(「不幸・欠如の解消」)。「この機能は、話の発端にあった「加害」「不幸」「あるいは「欠如」と、対をなしている機能です。この機能によって、話は、その頂点「リクールは『やま場』と訳す——筆者」に達したことになります(八二頁)。機能XX 主人公が帰路につく(「帰還」)は出立が矢印↑で示されたように、矢印↓で示される。リクールは言う。「これ以上に、目的論的な統一の原則が、機能の分節や機能間の単純な継起の原則に対して優越することを強調するものはない」と(「時間と物語」II六三頁)。機能XXからXXVIまでは新しい危険、新しい闘争、新しい救いなど、大団円を遅らせる。

(v) 最終の機能、つまり主人公が発見・認知される(XXVII「発見・認知」)、ニセ主人公あるいは敵対者(加害者)の正体が露見する(XXVIII「正体露見」)、主人公に新たな姿形が与えられる(XXIX「変身」)、敵対者が罰せられる(XXX「処罰」)、そして、主人公は結婚し、即位する(XXXI「結婚」)。「以上で、話は終わります」。プロッ

プは登場人物の機能の章の一般的な結論として言う。「これまで見てきたように、機能の数は、実際に、きわめて限られている。たった三一の機能を指摘しうるにすぎない。これらの機能の範囲内で、私たちの資料にふくまれている総ての昔話が余すところなく、展開されている。また、たがいにまったく異なるさまざまな民族の他の説話の多くの筋も、これらの機能の範囲内で展開されている。さらに、これらの機能の総てを順次読み通すならば、ある機能が別の機能から、論理の必然性と芸術の必然性にしたがって、派生している、ということも見てとれる。いかなる機能も、事実、他の機能を排除するものではない、ということも。機能は、すでにのべたように、その総てが、いくつかの基軸ではなく、単一の基軸に属している」と(以上、九八—九九頁)。

このように単一の基軸に沿った機能の系列をメタ言語で表現したものが「図式」である。「図式」とは、一五四—一五八頁にあるように、個々の昔話のテキストのそれぞれのまとまりに、メタ言語の記号を当てはめて、記号化したものである。「個々の昔話にとって、この図式は、計器「リクール」は「尺度」と訳す——筆者」に当たります。織物に物指しを当てることで、織物の長さが計られるのと同じように、個々の昔話「というよりは個々のテキスト」には、この図式を当てはめて、それによって「当のテキストが魔法昔話であるかないかを」確定することができます。「形態学の立場からいえば、『加害』……あるいは『欠如』……から始まり、いくつかの中間をへて、『結婚』……なり、結末として用いられるその他の機能なりで終る展開であれば、これらはすべて、魔法昔話と呼ぶうるものです。なお、結末として用いられる機能としては、『結婚』のほかには、『褒賞』……、『獲得』……あるいは一般に『欠如の解消』……、『追跡からの救助』……などがあります。「一連の機能から成る」この種の展開を、私たちは、行程「単位説話。リクールは『連続場面』と訳す——筆者」と呼ぶことにします。どのようなも

のであれ、新たな加害行為、新たな欠如は、いずれも、新たな行程を開きます。したがって、一篇の昔話になかに、いくつかの行程がふくまれる、ということもあります。そこで、テキストを分析するさいには、当のテキストが、行程をいくつふくんでいるかを、確定する必要があります」（以上、一〇〇・一四八頁）。

(四) プロップは「登場人物への機能の割り振り」の章で、言う。「……機能の多くが、論理的に結び合つて、一定の「行動」領域をつくりあげている、ということは指摘できます。それらの領域を総て合わせたものが、機能の荷い手たちと対応することになります。それが行動領域です。「魔法」昔話には、次のような行動領域があります」。七人の登場人物が挙げられている。敵対者（加害者）、贈与者（補給係）、助手、王女（探し求められる人物）、派遣者、主人公、ニセ主人公。「……登場人物に機能がどう割り振られているかという問題は、個々の人物に、「今確認した」行動領域がどう割り振られているかという問題として、解決できます」。

一人の登場人物が一つの行動領域と対応・一致している場合、一人の登場人物がいくつかの行動領域にかかわっている場合、一つの行動領域が幾人かの登場人物たちに割り振られている場合がある（二二五—二二九頁）。

「ここで一度」想い起しておきますと、①「昔話の」基本的な構成部分は、登場人物たちの機能でした。②さらに、結びの要素もありました。③動機づけもありました。④特別の位置をしめていたのは、登場人物たちの出現の仕方です（蛇の飛来、バーバ・ヤガーとの出会い）。⑤最後に、「登場人物の」属性を示す要素、バーバ・ヤガーの小舎とその粘土の足といった類の、付属の要素もありました。これらの五種の要素は、すでに、昔話の構造だけではなく、一篇の昔話の全体をあますところなく規定しております⁽¹⁰⁾（一五三頁）。

(五) 以上、やや詳細にプロップの形態学について述べたが、プロップが「機能」概念を人物と切り離して定義し

ていながら、人物と機能を結びつけることによってのみ、説明していることは明らかである。このことは、機能の定義を登場人物の行為、しかも、筋 \parallel 出来事全体の展開過程にとつての意義という観点から見た登場人物の行為であるとするところに最も良く表れている。また、機能群による人物の行動領域の定義や、機能の配置と人物間の行動領域の配置の関連、一篇の昔話の全体をあますところなく規定している機能以外の要素についての記述なども、このことを論証している。これはリクールも指摘するように、そもそも機能を定義する名詞(加害、欠如など)は、常に動作主を要請する行為の動詞と関係づけられるからであるが、「アリストテレスのミュトスの定義から発する筋立ての機能こそがまさに、じつにさまざまな要素を、異質なものの総合とわれわれが呼んだものの中に結合するのであり」、「筋立てというのは、性格の発展とストーリーの発展との相互発生から発してくるのではないかと問うてみることもできる」(『時間と物語』Ⅱ六四—六五頁)⁽¹¹⁾。

ここでもポール・リクールの総括が妥当である(『時間と物語』Ⅱ六六—六七頁)。リクールのプロップ批判は二点にわたる。第一点。プロップによつて再構成された原 \parallel 民話「原 \parallel 魔法昔話」は、そもそも民話ではない。それは誰によつても、誰に対しても語られない、分析的合理性の産物にすぎない。「機能への細分化、機能の類的な定義、継起の唯一の軸上への機能の配置などは、原初の文化的対象を、科学的対象に変換する操作である。この変換が明らかになるのは、機能の全部を代数的に書き換えることが、まだ日常言語から借用していた名称を消してしまつてもはや並列された三一の記号の純然たる継起に帰結する以外になくなつたときである。この継起はもはや原 \parallel 民話でさええない。なぜならそれはすでに民話ではないからである。それは系列である。つまり連続場面(シークエンス)(または進展 move)の線状的痕跡である」と。⁽¹²⁾

第二点。この「……合理性は、民話の産出と受容に肝要不可欠な物語理解にとつてかわることはできないということである。なぜなら、この合理性はみずからを構成するために、たえずこの物語的理解から借用することをやめないからである」。「こうして、物語論的合理性を確立する認識論的断絶があるにもかかわらず、この合理性と物語的理解とのあいだにも、……歴史記述的合理性と物語的理解とのあいだに明らかにした関連性に比すべき関連性を再発見できるのである」と。

二 ブレモンの物語の論理学⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾

(一) クロード・ブレモンはプロップの見つけ出した結論、つまり、「あらゆる魔法昔話に共通なひとつの基軸」[総括の図式]とした。魔法昔話は、単一の類型「原型」に属している」という結論(『昔話の形態学』三八頁)について言う。「ロシア民話の分析の驚くべき結果を説明するつぎのような二つの仮説がある。A——プロップが考えているように、彼の方法は、それに適した材料から△機能—軸▽を明るみに出した。確定した結末に向かつて行くロシア民話においては、そのような機能は欠如している。B——プロップの方法は、△機能—軸▽に出合うようなものではない。とすると二つのことが考えられる。(a)ロシア民話は機能—軸をもっていない。プロップの方法はそれに適合したけれども、そのような形で他の材料に応用されはしない。(b)ロシア民話は、機能—軸を、少なくとも未成熟な形ででも、実際にもっている。それらをつるい落としてしまったのはプロップの方法である」と。ブレモンは「仮説Bの選択が正しいように思われる」と言う(二〇—二二頁)。

ブレモンは言う。「いくつもの機能は、単なる事実問題としてではなく、権利問題としての必然性に従つて、一

方が他方の存在を想定させる。そして系列の中での継続の法則は、変えることの出来ない仕方では支配されている。他の機能は、蓋然的な頻度の関係によってつながれ、事実の都合や文化的慣習によって説明される。たとえば、到着という機能は論理的に旅行を想定させ、旅行は論理的に救出を想定させる。救出は救援者の介入を想定させ、危機を想定させる。処罰は裁きの行動を想定させ、これは害悪を想定させる。反対に、処罰と救出とのあいだには、或いは救出と謝意の表明のあいだにさえも、単なる蓋然的なつながりしかない。その蓋然性が大きくなったとしても、頻度が高いということはそうなるように強制することにはならない。そして特に、頻度は、連合した極の継続の順序を決定したりしない」と(三四—三五頁)。

このようにしてプレモンは「ある機能が別の機能から、論理の必然性と芸術上の必然性にしたがって、派生している」(『昔話の形態学』九九頁)というプロップの主張を否定する。「或るときは論理的必然性により、或るときは美的配慮によるのである」と(三二頁)。プロップは「闘い」の機能には「勝利」の機能が必ず続くと言うが、たとえば、闘いの後に王女の救出に失敗する話においては、プロップは「闘い」の記号をつけずに、別の記号をつける。「これは、勝利に至らない闘いは闘いとは考えない、ということであるのである。物語の分れ道というものがないということが驚くべきではなく、プロップがそれを見出さなかったことが驚くべきことなのである」(二三頁)。プレモンは結末から遡る目的論的必然性を採用して、プロップの「△構造▽の究極性の概念」を否定する(二四頁)。「しかし結末が気になるということの上に成り立っている話し言葉(パロール)(最終層が最初の言葉を選択させる)の観点から、言語(ラング)(最初の層が結末を決める)の観点へ移ると、関係は逆転する。どんな終りかではなく、どこが終りかということから出発することで、ロシア民話の一般言語に網状組織をつくるこ

とが可能になり、ロシヤ民話の特殊な話しことばが可能なものを選択し、われわれはそこに機能の連続をつくり上げるのである。勝利から闘いを引き出すのは論理的要請であり、闘いを勝利に結びつけるのは文化のひとつの型である」(二九—三〇頁)。プレモンは言う。プロップの示唆する組合せ、「それらは純粹に經驗的な連合であって、經驗自身が例外を殖やして行ってそれ自体をこわしてしまふことになる」と(三三頁)。

(二) プレモンは「機能と系列のあいだにある自律的な構造的存在」(三二頁)、「系列よりは小さくて、しかし機能よりは大きい単位」(三五頁)として「基本的連続(sequence elementaire)」[リクールは「基本的連続場面」と訳す——筆者]を立てる。「①基本単位として、物語の原子として、機能が残る。プロップにおける機能のように、連続(シークエンス)としてグループ化し、ひとつの物語を生み出す行動や事件に適用される。②三つの機能の集りが、基本的連続を生み出す。この三つは、あらゆる経過がもっている三つの相に対応する。(a)取られるべき行動とか予想される事件などの形をとって、経過の可能性を開く機能。(b)それらの潜在性を、行動や事件の形のもとに実現する機能。(c)その経過を達成された結果という形のもとに、閉じる機能。③プロップとは違って、これらの機能はいずれも、連続のなかでつぎに続く機能が必要としない。逆に、連続をつくり出す機能が設定されたとき、話者は、それを実現する自由と潜在状態においておく自由をつねに保有している」(六六頁)。「基本的連続によってこのように開かれて

目的達成
(行動の成功)

目的不達成
(行動の失敗)

現 実 化
(目的に達するための行動)

現実化の欠如
(無気力、行動阻害など)

潜 在 性
(到達すべき目的)

いる可能性の網は、つぎのモデルのようになる。」

「④基本的連続は、お互いに結びついて、複雑な連続を生み出す。それらの結合は、変化しやすい取り合わせで実現される。もっとも典型的なのを取り出してみよう。」

(a) \wedge 端と端 \vee の連携。たとえば、

行われるべき加害

←

害意

←

行われた加害 \parallel 報復されるべき行為

←

報復の過程

←

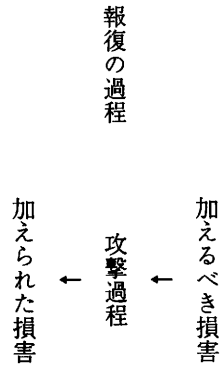
報復された行為

(b) 困り込み。たとえば、

※ \parallel はひとつの事件がひとつの役割を果すなかで、異なる機能を同時にもつことを意味する。

行われた加害 \parallel 報復されるべき行為

←



報復された行為
連繋。たとえば、

加えるべき損害 Δ S 行われるべき加害

← 攻撃過程 VS 害意 ←

加えられた損害 Δ S 行われた加害 || 報復されるべき行為

※ Δ S は、同じ動きが、動因 A の見通しの中では a という機能を果たし、B の見通しの中に移れば b という機能を果たすという意味である（以上、六七―六九頁）。

ブレモンは言う。「物語の構造を、一定の順序に従って継続する極の鎖の形になぞらえてしまいかわりに、われわれは、物語の構造を、いくつかの連続の並列と考える。それらの連続は、重なり合い、結びつき合い、交叉し、筋肉組織や編み紐の糸のように吻合されている。各連続に沿って機能の位置は厳密に決定される。逆に機能自体が

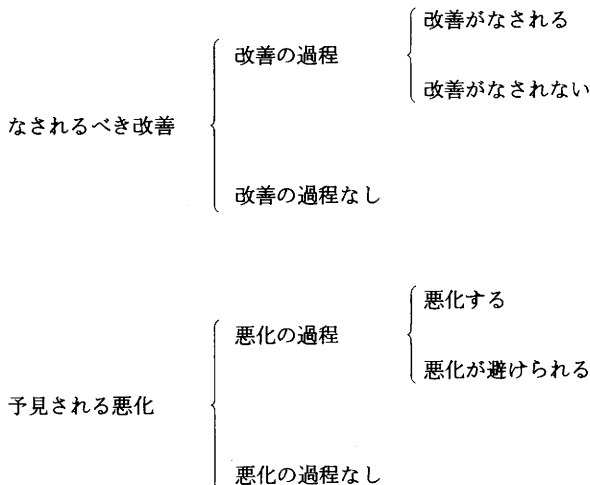
結びついてゐる連続からは原則として独立しており、すべては結合し合うことが出来、あとにつづくことも出来る。このような驚きを作り出せるのは、物語の利益でさえある。しかしこの理論の上での自由は、事実の制約を受ける。諸連続は、類似と反発力をもっており、それは化学に於ける、単体の結合の法則に比べられるもので、非常に蓋然的な接近を促進し、他のものを排除する効果がある」(二三五—二六頁)。

(三)「すべての物語は、同じひとつの行動単位の中で、人間の関心を引く出来事のひとつづきをつくりあげる論述(ディスクール)「ウンベルト・エーコヤリクルの用語では『言述』——筆者」から成り立っている。継続のないところに物語はない……。同じひとつの行動単位の中で、統合のないところに物語はない。単に年代記があるだけであり、無秩序な事実の羅列の陳述があるだけである。結局人間の関心にかかり合うものがないところには(報告される出来事が動因から生み出されたものでもなく、人間の形をしたものがそれを受けていないところでは)、物語は存在し得ない。何故ならば出来事が意味をもち、構造化された時間的系列に組織されるのは、人間の意図との関係においてのみだからである」(七〇頁)。

「その意図に賛同するか反対するかによって、物語の中の出来事は、二つの基本的なタイプにわけることが出来る。そしてそれはつぎにつづく連続にしたがっていろいろ発展する」(以下七〇—七一頁)。

「こうしてわれわれは二分法的選択の系列とかかわりをもつことになる。人は驚くかもしれない。各瞬間に存在する選択の系列が、どうして無数の可能事に分散しないで、二者択一に還元されるのだろうか。さらにそれは特に基本的な二者択一である。可能となるか、可能とならないか、行為となるか、潜在力のままでいるか、目的を達成するか、達成しないか。この単純さは、しかしながら、方法のせいではなく、物語のメッセージの性質なのである。

基本的連続によってつくり出される経過は、あいまいなものではない。それはすでに固有の構造をもっている。ちょうど水の流れが海にいたるように、坂を下って行く。作者が物語の素材に構造を与えるためにそれを取り込もうとするとき、この方向性が課される。彼は堰堤を設けたり、支流をこしらえたりすることは出来るが、最初の方向を全然なくしてしまうことは出来ない。基本的連続は、弓を引く動作の諸段階に比較される。主な状況は、矢がつかえられ、放たれるばかりになったときに設定される。そのときの二者択一は、即ち、矢を放つか、そのままに保っているか、である。「したがって基本的連続の中で対立する二元性は不可思議でもなんでもなく、この二元性は時間線の単層性を引き入れ、その束によって物語がつくられる」と(四一—四二頁)。プレモンは「改善」の過程として「仕事の達成」、「味方の介入」、「競争者の排除」(これはさらに「取引」か「攻撃」に分かれる)、そして「報酬・代償と復讐」について述べ、「悪化の過程」として「あやまち」、「強制」、「犠牲」、「加えられた攻撃」、「処罰」について述べる。「それらの各相は、それ自体で無限に発展し得る。しか



しその發展過程で、△物語可能な▽場をあますところなく決定する、いつも同じかこまれた連続の階級組織の中に、交互の選択によって、それらの各相は特殊化されていくだろう。基本的連続の中の諸機能のつながりと複雑連続中の基本的連続の諸機能のつながりは、自由であり(なぜならば話者は各瞬間に物語のつづきを選ばなければならぬいからである)、同時に制御されている(なぜならば話者は、各選択のあとでは、連続しない矛盾した二つの極のどちらかを選ぶ以外ないからである)。(九五―九六頁)。「人間のもつとも一般的な行動の形式は、このように基本的物語のタイプに一致する。仕事、契約、あやまち、わな等々は、全世界的なカテゴリーである。それらの内部的分節と相互関係は、可能な経験の場を先験的に決定する。われわれは、物語性のもつとも簡単な形から出発して、連続、役割、だんだん複雑に異なる状況の連鎖などをつくりあげ、物語のタイプの分類の基礎を置いた。しかし、さらにわれわれは、基本構造はつねに同じだが無限の選択可能性と結合のはたらきにしたがって、文化と時代と類と個人的文体にしたがって、無限に多様化する行動を比較研究するための参照の枠を決定する。文学の分析技術、すなわち物語の記号学は、人類学に根をおろしていることからその可能性と豊かさを引き出している」と(九六―九七頁)。

(四) プレモンは行動よりもその行動の動作主である人物から出発して、その人物が物語において引き受ける「主要な物語的役割の体系的目録」を作成する。プレモンにとって機能とは、行動を起こす能動者、または、行動を蒙る受動者を動かす利害または自発性を表すものである。さらに、基本的連続「場面」が同一人物のストーリーに關係する時には、物語の展開につれて数個の機能が繋がって行く。したがって、「役割」とは、「主語としての人物に、起こり得る、おこなわれつつある、または完了した述語としての過程を賦与すること」である。ここで、「行動の

連続「場面」という概念に、「役割の組合せ」という概念が置き換わる。⁽¹⁵⁾

ブレモンは能動者と受動者の役割について詳述する。「われわれが受動者の役割を果たす人物として定義するのは、物語られる出来事の流れによつて、何らかの仕方の影響される人として、物語が提示する人物のことである」。二つの型の受動者が区別される。一つは、受動者が自分の運命について抱く主観的意識に作用する「影響」である。この影響には、情報と感情が含まれる。もう一つは、客観的に受動者の運命に働きかける「作用」である。能動者は変更する、あるいは維持する過程を自発的に起こす人物であるが、受動者に及ぼす影響の概念と結びついて、変更者と維持者、改善者と改悪者、保護者と失望させる者が区別される。⁽¹⁶⁾

改善や改悪、保護や失望などの概念によつて、役割概念に「価値づけ」の領野が導入される。自発的に行動できる能動者は、語の強い意味での「作用」の領野に属する。ブレモンの目録は、良い評価と悪い評価を考慮することとで完結する。「物語のメッセージ」にもあつたように、受動者の側で良い評価は「恩恵を受ける人」であり、悪い評価は「犠牲者」の役割である。能動者の側では、「報酬で報いる人」と、「罰で報いる人」の役割である。こうして、「報い」の領野が加えられる。⁽¹⁷⁾

(五) ブレモンは「物語のメッセージ」には方向性「リクルールは『ベクトル性』と訳す——筆者」があることを認めるが、リクルールが指摘するように、この方向性は実は、筋からの借用なのである。基本的連続と複雑な連続を認めるブレモンの論理学は物語の可能性の論理学であり、行動の論理学でしかない。それは「役割の語彙や統辞法、したがって役割の文法」にすぎない。ブレモンの役割目録は、いわば動かないのである。リクルールは言う。ブレモンの論理学が「物語の論理学となるためには、文化的に認められた統合形象化のほうに、伝統から受けとった筋の

中で働いている物語の図式作用のほうに、その向きを変える必要がある。この図式作用によってのみ、行為は物語られるものとなる。実践的可能性の論理学を、物語的蓋然性の論理学のほうに向きを変えさせるのが、筋の機能である。「……筋は物語ることの実践に属し、したがってラングの文法ではなく、パロールの語用論〔Ⅱ実用論〕に属する。この語用論は想定されるものであつて、役割の文法の枠内でつくられるものではない」と(『時間と物語』Ⅱ七三―七四頁)。

ブレモンも上の指摘を認めている。表に示された役割は、「物語に現われ得る役割だけでなく、物語によって、物語のために現われ得るものでもある。物語によつてとは、物語行為の最中に、ある役割が出現したり、抑制されたりするのはつねに語り手の裁量にまかされ、そこで語り手はその役割について黙るか語るかを選択するという意味においてである。また物語のためには、役割の定義は、プロップが意図したように、筋の展開における役割の意味という観点からなされる、という意味においてである」と⁽¹⁸⁾。しかし、リクールも認めているように、「物語的役割は、人間の行動の構造を物語の支配圏の中に入らせる適性をもつゆえに、物語的役割を定義できる述語を、行動の意味論を媒介にして、いわば募集することは、どんな筋立ての中でもおこなわれている物語的实践」(『時間と物語』Ⅱ七五頁)であり、この点でブレモンの貢献は大きいのである。

Ⅱ 物語の構造 はじめに

(1) ウンベルト・エーコの「記号論」の文献は以下の通りである。

U・エーコ(池上嘉彦訳)『記号論』Ⅰ・Ⅱ、一九八〇(一九六)年

同(篠原資明訳)『物語における読者』、一九九三年(以下、本書と略す。なお、本文引用の頁数は本書の頁数)

同(谷口 勇訳)『記号論と言語哲学』、一九九六年

参照、エーコ(和田忠彦訳)『エーコの文学講義——小説の森散策』、一九九六年。なお、必要な場合には、ロラン・バルト(沢村昂一訳)『記号学の原理』・バルト(渡辺淳・沢村昂一訳)『零度のエクリチュール』、一九七一年所収と、ジュリアン・クリステヴァ(谷口勇訳)『テキストとしての小説』、一九八五年を引用する。

「記号論」と「記号学」については『記号論』I、五〇—五二頁参照。本文指摘の図は本書一一三頁、『記号論と言語哲学』三二二頁にある。

(2) 本書一三—一四頁による。「テキスト間相互関連性」を主張するクリステヴァも(『テキストとしての小説』四四四頁の事項索引参照)レヴィーストロースのこの考えを認めないであろう。

(3) 本書二二頁。エーコ自身の文章。以下「」内は、本文にない挿入文。

(4) エーコ『記号論』I一八頁。

(5) ヴィンフリート・ハッセマーの用語解説を挙げよう。「統辞論」(SyntaxまたはSyntaxik)においては、言語記号相互の関係、文法・論理・形式・構造が問題となる。「意味論」(Semantik)においては言語記号の事物との関係、意義・経験・現実が問題である。「実用論」(Pragmatik)においては言語記号とその具体的状況での使用、行動・伝達・レトリック・語りが問題となる」と(Winfried Hassemer, *Einführung in die Grundlagen des Strafrechts*, 2. Aufl., 1990, S. 178)。エーコは注において「実用論」とは「自然言語における伝達の、話し手および聞き手への、さらには言語的ならびに言語外的コンテキストへの依存性」の研究、そしてまた「背景知の自由処理性、この背景知の獲得における迅速性、伝達行為参加者の善良な意志」の研究であるとするBar-Hillel, 1968を引用する。

- (6) 意義素とは意味単位の意味表記であつて(エーコ『記号論』I二二頁)、どのようなコンテキスト、状況に關しての選択に際しても変化を蒙らない表示義的な標識と、さまざまなコンテキスト、状況に關しての選択に従つて異なる表示義ならびにそれに伴つて異なる共示義を持つ。コンテキストに關しての選択では、問題となる意義素と通常結びついている他の意義素または意義素グループも記録される(エーコ『記号論』I一八五—一八六頁)。エーコは表示義と共示義に關しては「ウォーター・ゲート・モデル」によつて説明する。「二つの山の間の盆地に河川流域があつて、水門で閉ざされているとする。技師が下流の方において、この流域の水量が一定の滴水レベル——技師が「危険水位」と呼ぶことにしているもの——に達したかどうか知りたいと思うとしよう」。電気信号が一定の機械的メッセージを作ることとする。A Bは危険水位を表示し、放水と洪水を共示する。B Cは警戒水位を表示し、警戒状態を共示する。C Dは安全水位を表示し、安定状態あるいは警戒の休止状態を共示する。A Dは不十分水位を表示し、注水と旱魃を共示する。表示義と共示義の違いはコード上の慣習に基づくものに過ぎない(エーコ『記号論』I五六—五七・六〇・九三—九六頁)。
- (7) エーコ『記号論』Iの二・二三。
- (8) 「リゾーム」については、エーコ『記号論と言語哲学』一五八—一五九頁と、ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ(宇野邦一／小沢秋広／田中敏彦／豊崎光一／宮林寛／守中高明訳)『千のプラトリー…資本主義と分裂症』、一九九四年、一三—三九・五六—五六三・五七三—五七六頁を参照。
- (9) 「外延」と「内包」とは、たとえば、平凡社の『世界大百科事典』二三卷二六頁によると(上田泰治執筆)「ある名辞によつて呼ばれる事物の集合を外延というのに対して、それらの事物に共通な性質をその名辞の内包という。……内包および外延は伝統的には名辞について語られてきたが、現代では命題に關しても用いられる。ある命題の主張される場合、その集合をその外延と考えれば、その意味、すなわち、主張内容をその内包と呼ぶことができる」と一般に理解されて

いる。エーコの図において用いられている「外延」と「内包」という概念は、これとは違い、内包とはある表現の意味であり、これはコードの理論と結びつく。外延とは真理値の理論、言及の理論と結びつく概念であって、ある表現が外界の指示物・言及対象を持つことを言う。エーコの場合には、ある表現の意味、つまり、内包は、その表現の真理値、つまり、外界の現実の状態と合致しているか否かとは独立に理解されている（エーコ『記号論』I—100—125・251—252三頁）。

(10) ジョン・サール（坂本／土屋訳）『言語行為——言語哲学への試論』、一九八六年。

(11) 「過剰コード化」とは「既存の規則から成る第一のレベルを基盤として新しい規則が生み出され、それに基づいてテキストのもっと巨視的な部分を分節するということを言い、「過小コード化」とは「信頼するに足る既存の規則がない場合に、もっと基本的な結合規則とそれに対応する単位が不明のまま、テキストのある巨視的な部分が唯一の関与性のある単位であると仮定される場合」を言う（エーコ『記号論』II八頁）。挨拶、たとえば、*“How are you?”* のような儀礼は、表示義の他に慣習的な共示義を伴うが、これらが「過剰コード化」の例であり、異国の地において社交的なやりとりを行う際に、正確には分からないけれども、大まかなコード化を行う場合は「過小コード化」の例である。

(12) 本書は paradigmatic を「範例的」（論者により「系列的」や「連合的」と訳すこともある）、syntagmatic を「連辞的」（論者によっては「統合的」と訳す）と邦訳している。この用語はもともとはソシュールに由来するが、この用語を使って失語症を分析したのが、ロマン・ヤコブソン（Roman Jakobson）であった。ヤコブソンによれば、言語による発話は、一つの言語体系が作り成している共通の貯蔵庫から、発話に必要な語を選び出して来る「選択」と、そのように選り出された語を統辞法に従って一定の順序で並べる「結合」の、二つの側面から成り立っている。ヤコブソンは選択と結合はそれぞれ相似性（類似性）と隣接性（近接性）の二つの関係を前提にしていると言う。ヤコブソンによれば、失語症はこれ

ら二つの関係の障害として現れる。第一のタイプの失語症は相似性の障害タイプであり、一応の統辞法は守られているが、語の選択がうまく機能しない。丸山圭三郎『言葉・狂気・エロス——無意識の深みにうごめくもの』、一九九〇年一一四頁の挙げる簡潔な例によれば、「病院に来る途中で何を見ましたか」という医師の問いに対して「私は、小さな、犬を、見ました」と答えるつもりで、「私は、雨もよいの、犬を、食べました」と答えるたぐいである。従来は感覚失語とかヴェルニック失語と呼ばれて来たもの。第二のタイプの失語症は隣接性の障害タイプであって、語の選択はできるが、結合能力を失った患者で、「犬、私、小さい、見た、一匹」というように、脈絡のある文を組み立てられない。従来は運動失語とかブローカ失語と呼ばれて来たもの(参照、小林敏明『精神病理からみる現代思想』、一九九一年四章)。本書の理解のためには、これで十分であると思うが、若干、敷衍しておきたい。まず、失語症の研究はさらに進み、現在ではヤコブソンの分類はあまりに単純であると考えられている(ステイーブン・ピンカー(棕田直子訳)『言語を生み出す本能』(下)、一九九五年一〇三—一四九頁)。ヤコブソンはこの考えを隠喩(メタファー)と換喩(メトニミー)の区別へと展開する(参照、リンダ・ウォー「詩的機能と言語の性質」、クリスチーナ・ポモルスカ「散文の詩学」・ロマン・ヤコブソン(浅川順子訳)『言語芸術・言語記号・言語の時間』、一九九五年所収)。ロラン・バルトの記号学はこの延長線上にある(バルト『記号学の原理』)。エーコ『記号論』II三・八は指示対象の類似性・近接性ではなく、意義素の表記のレベルでの同一性と相互依存性によって問題を処理する。なお、「離接」とは新村出編『広辞苑』第二版補訂版によれば、「選言」と同義であり、あらゆる可能な選択肢のうちから、相互に排他的なものを選ぶことを言う。A・J・グレマスの用語では、何かしら共通のものを持つ二つの辞項がまとめて把握される場合が「合接」であり、お互いに異なっている辞項が区別される場合が「離接」である。たとえば、route nationale (国道)とroute departementale (県道)は一方の要素(route, 道)は構造を合接し、他方(nationale, 国の vs departementale, 県の)は構造を離接している(A・J・グレマス(田島宏/鳥

居正文訳) 『構造意味論：方法の探求』、一九八八年、二二頁)。

(13) 本書はこの外延的同位体には触れていない。この部分はエーロ『記号論と言語哲学』三六七―三六九頁による。

第一章

(1) ジョセフ・ガスフィールド「序章」・ガスフィールド編(森常治訳)『ケネス・バーク：象徴と社会』、一九九四年一頁(これはガスフィールドが巻頭論文付きで、バークの著作の重要部分を編集したもの。非常に便利である。以下、『象徴と社会』で引用)。その他、バーク(森常治訳)『文学形式の哲学』、一九九〇年改訂版、バーク(森常治訳)『動機の文法』、一九八二年。本稿では取り上げられないが、ガスフィールドはバークの修辞学に影響された業績として、Joseph Gusfield, *The Culture of Public Problems: Drinking, Driving and the Symbolic Order*, 1981、Peter Manning, *Police Work, 1977* を挙げる。前者は「飲酒運転者」か「飲酒運転」によって原因が異なっつ考えられることを問題とし、後者は犯罪撲滅の戦士という「警察神話」を扱ったものである。

(2) (4) Dennis Brissett/Charles Edgley, "The Dramaturgical Perspective", in: D. Brissett/Ch. Edgley (ed.), *Life as Theater: A Dramaturgical Source Book*, 2nd Ed., 1990, pp. 1-46.

(3) Erving Goffman, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, 1974, p. 562.

(5) Erving Goffman, *The Presentation of Self in Everyday Life*, 1959.

(9) E. Goffman, *Frame Analysis*, 1974, chapter 5.

(7) A. Paul Hare and Herbert Blumberg, "The Dramaturgical Perspective", in: A. P. Hare and H. Blumberg (ed.), *Dramaturgical Analysis of Social Interaction*, 1988, p.3-14, esp. p. 11-12.

- (8) ここで参照すべきは、バーク「行為者としての人間——人間の定義」(『象徴と社会』九一—二〇頁、同『文学形式の哲学』九九—一九頁)の二の「人間は否定形の発明者である」と、バーク「経済学と心理学との関係についての二二の命題」(同『文学形式の哲学』二八七—二九三頁)の二二命題「人間関係は劇の研究によって発見されたものを手掛かりとして分析されるべきである」、二二命題「象徴的劇と生活劇との差異は想像上の障害と現実の障害との差異である。しかし象徴劇中の想像された障害が観客に的確に伝わるためには生活劇における現実の障害を反映していなければならぬ」。ロバート・ペリンバナヤガムは劇学を「われわれ人間とは何か」ということであるとすバークを肯定的に引用しつつ(Kenneth Burke, "Dramatism and Logology", *Times Literary Supplement*, 12 Aug. 1983)、「言へ。」「存在論としてのドラマは、一方で人間は象徴によって伝達する他にはないし、人間はわれわれの周りに居る他人が自分達の周りの世界を解釈していることを意識する他はないという前提、そしてこのような伝達が、伝達の媒介手段の選ばれた特徴の間の論理的関係の助けを借りて達成されるという前提から、むしろ離陸している。世界は、ドラマのようにある主題を展開・提示する、伝達する価値のある社会的事実あるいは社会的対象によって構成されている。」「劇場はそこで、社会とは別個の何物かではなく——社会が何かの目的その他を逃げるために作り上げた何物かではない。むしろそれは、社会において何時でも行われていること——あるいはもっとはっきり言えば、実際に社会関係であるものの結晶化・典型化なのである」と(Robert Perinbanayagam, *Signifying Acts: Structure and Meaning in Everyday Life*, 1985, pp. 62—63)。
- (9) D. Brisset/Ch. Edgley, op. cit., p. 34—36.
- (10) Alan Dershowitz, "Life is not a dramatic Narrative", in: Peter Brooks and Paul Gewirtz (ed.), *Law's Stories: Narrative and Rhetoric in the Law*, 1996, pp. 99—105. O. J. シンブソン事件については綿密な資料に基づいて、「人種カード」論を否定する四宮啓「O. J. シンブソンはなぜ無罪になったか・誤解されるアメリカ陪審制度」、一九九七年。

- (11) Peter Brooks, "The Law as Narrative and Rhetoric", in: P. Brooks and P. Gewirtz (ed.), *op. cit.*, pp. 19-20. ブルックスの発言は小野坂「物語の意義と構造」(一)五頁に引用してあるので参照されたい。人生と物語についての最新の文献として河合隼雄・村上春樹「村山春樹、河合隼雄に会いにいく」、一九九六年。
- (12) ライト・ミルズは動機とは言語的装置であるというバークの動機論を基本的に引き継ぐが、バークの「動機を反省するわれわれのことばは、あい矛盾し衝突する刺激の典型的なパターンのおおまかにして、速記的な描写である」(『象徴と社会』二〇〇頁)を引用する(C. Wright Mills, "Situated Actions and Vocabularies of Motives", in: D. Brissett/Ch. Edgley (ed.), *op. cit.*, p. 208)。しかし、バークは行動主義心理学の「刺激-反応」モデルを人間に適用することには反対するから、本稿はこの一節の見出しを引用する。なお、前掲のプリセットとエッジリイはドラマツルギーの立場から、人間の動機を人間の内在的あるいは外在的な力によって説明する理論を退けて、動機を、人間の置かれた状況における行動を正当化あるいは合理化する、表現的な伝達装置であると考える(D. Brissett/Ch. Edgley (ed.), *op. cit.*, pp. 22-23, 201-206)。ミルズの前掲論文の他には、スコットとライマン、ゴフマン、ナヴァスキー、スカリイとマローラの論文が掲載されている(Marvin B. Scott and Stanford Lyman, "Accounts"; Erving Goffman, "Remedial Work"; Victor S. Navasky, "The Reasons Considered"; Diana Scully and Joseph Marolla, "Convicted Rapists' Vocabulary of Motive: Excuses and Justifications", in: D. Brissett/Ch. Edgley (ed.), *op. cit.*, pp. 207-280)。本稿で紹介したバークの立場を展開したものと言える。極めて興味深い内容であるが、物語の構造を扱う本稿では論じられない。
- (13) バークの著書では「五つ組基語間の全比率」が最後に来ているが、内容を考えて、冒頭に持って来た。「比率」についてバークの説明は少ない。本文中に引用した「比率は term (基語・条件) の決定 (determination) の原理なのだ」(『象徴と社会』二五一頁。『動機の文法』四一頁)の他には、「例えば、〈「場面」-「行為」比率〉というときには、「場面」

が「行為」におよぼす効果に照明が当てられようし、それに対して「行為」——「場面」比率 ∇ というときには、「行為」が「場面」に対してもつ影響力に照明が当てられよう」（『動機の文法』四五八頁）と「時に、こうしたすべての比率は本質的にアナロジー（つまり、類比的対応の発想に基くもの）である点にわれわれは注目してもよからう。すなわち、「場面」——「行為」比率 ∇ によってわれわれが意味するものは、「行為」がもつ性格は、「場面」のもつ性格のなかにあらかじめすでに暗々裡に、あるいは類比対応的に存在している、ということなのである」（『動機の文法』四五八頁）のみである。ガスフィールドは「比率」について次のように述べる。五つ組の各要素間の相互関係を「比率（ratio）」と言う。ここで重要なことは対立する、対になった要素間にバランスを保とうとする傾向の欠如である。どちらの視点を採用するかで同一現象が全く違った意味を帯びる。ガスフィールドは自分自身の研究から例を引き、「飲酒運転者」（すなわち、行為者）に焦点を当てると、運転者の精神構造が問題となるし、「飲酒運転」（すなわち、行為あるいは場面）に焦点を当てると、車の構造や道路設計、事故発生状況などが問題になると言う。前掲のバークの文章に言葉を補って、ガスフィールドは「 ∇ 五つ組 ∇ 間の ∇ 比率 ∇ は（事件の性格についての）決定の原理である」とする（ガスフィールド『象徴と社会』二六—二七頁）。なお、バークは五つの基語の他に「姿勢（attitude）」を付け加えるが（『動機の文法』四六・四五七—四五八頁）、ほとんど全く論理を展開していない。

(14) D. Brisset/Ch. Edgley, op. cit., p. 13. バークは五基語の一つとして「意図」を挙げているから、この文章には「何故（why）」を補わなければならない。

(15) W. Lance Bennett and Martha S. Feldman, *Reconstructing Reality in the Courtroom: Justice and Judgment in American Culture*, 1981, pp. 96—98. 小野坂「物語論としての裁判論」法政理論二七巻三・四号、一九九五年一三六—一三九頁。

第二章

(1) ナラトロジーに関して参照した文献は次の通りである。ラマーン・セルデン(栗原裕訳)『ガイドブック現代文学理論』、一九八九年。フランク・レントリックキア／トマス・マクローリン編(大橋洋一／正岡和恵／篠塚実／利根川真紀／細谷等／石塚久郎訳)『現代批評理論…二二の基本概念』、一九九四年(特にヒリス・ミラー「物語」)。大浦康介編『文学をいかに語るか…方法論とトポス』、一九九六年(特に田口紀子「ナラトロジー」、北岡誠司「ロシア・フォルマリズムと構造主義」)。言語が違うと物語の構造も異なることについては、中山真彦『物語構造論…「源氏物語」とそのフランス語訳について』、一九九五年を参照されたい。

(2) 北岡誠司「ロシア・フォルマリズムと構造主義」・大浦康介編・前掲書一八五―二〇七頁。参照、フレドリック・ジェイムソン(川口矯一訳)『言葉の牢獄…構造主義とロシア・フォルマリズム』、一九八八年。

(3) エミール・バンヴェニスト(岸本通夫監訳)『一般言語学の諸問題』、一九八三年、二一八―二二六頁。バンヴェニストの *histoire/discours* は、歴史(物語)／言述である。前者は「ここでは誰も語っていない、出来事はひとりでに物語られるかのようなのである」のに対して、後者は「話し手と聞き手とを想定し、しかも前者において何らかの仕方では後者に影響を与えようとする意図」を指示する。ポール・リクールは前者に関してバンヴェニストの立場を批判する。「現実なのであれ、想像上なのであれ、過去の事象というのは、話し手が物語の中にあらゆる点で介入することなしに、提示され得るだろうか。出来事が、だれかが何らかの仕方では語ることなしに、歴史の地平に単に現れるだけ、というのは可能だろうか。歴史物語に語り手が不在であるというのは、語り手が物語に自分を不在にするための戦略の結果として生じてくることではないのか。……言表行為(バンヴェニストのいう意味での言述)と、言表(バンヴェニストにおける物語)とを区別すべきが物語においてであるならば、問題は二重になる。つまりそれは一方では、言表行為の時間と言表の時間との関係の問

- 題であり、これら二つの時間と、生もしくはは行動の時間との関係の問題である」と(リクール『時間と物語』II一四頁)。ジェラルド・ジュネットも同様に言う。「語り手のない物語言説、言表行為のない言表は、私には純然たる幻想のように思われる」と(ジュネット『物語の詩学・続・物語のディスクール』一〇七頁)。
- (4) 参照、和泉涼一「ジェラルド・ジュネットとその物語論について——解説にかえて」・ジェラルド・ジュネット(和泉涼一／神郡悦子訳)『物語の詩学・続・物語のディスクール』、一九八五年二二五—二五〇頁。
- (5) ポール・リクール(久米博訳)『時間と物語』II、一九八八年の他、前掲のジェイムソン『言葉の牢獄』と、Peter Brooks, *Reading for the Plot: Design and Intention in Narrative*, 1984, pp. 3—36. を参照された。
- (6) ロラン・バルト(花輪光訳)『物語の構造分析』、一九七九年四頁。バルトのその後の立場の変更については、ラマーン・セルデン前掲書二三一—二四〇頁とジェイムソン『言葉の牢獄』一五〇—一六七頁。
- (7) ロラン・バルト『物語の構造分析』七頁。リクールは構造分析が音韻論や語彙の意味論から物語に移行したとき、それは研究対象そのものの変換を含蓄することを強調する。物語という研究対象は物語記号論が登場する以前に既に実践と理解の対象となっていたから(『時間と物語』II五七頁)。ここで野家啓一『物語の哲学』、一九九六年七六—九〇頁を挙げよう。野家はアサー・ダント(河本英夫訳)『物語としての歴史』、一九八九年一七四—一九四頁の「物語文」(「これらの文の最も一般的な特徴は、それらが時間的に離れた少なくともふたつの出来事を指示するということである。このさい指示された出来事のうちの、より初期のものだけを(そしてそれについてのみ)記述するのである。通常それらは、過去時制をとる」。「しかしこの構造はまた、ある意味で通常行為を記述するのに用いられるすべての文に現れている)の定式化を引用して、物語文と物語を共に「経験の解釈装置」として同じように扱う。
- (8) ロラン・バルト『物語の構造分析』九—一二頁。この点についてはジェラルド・ジュネットを論ずる際に、再度、取り

- 上げることになる。分布（つまり言述・物語の要素間の関係が同じレベルに位置づけられる場合）と組み込み（関係があるレベルから他のレベルにかけてとらえられる場合）については、バンヴェニスト「一般言語学の諸問題」一〇章参照。
- (9) ウラジミール・プロップ（北岡誠司／福田美智代訳）『昔話の形態学』、第二版一九九一年。文献名を示さない本文中の頁数は本書の頁数である。参照、北岡誠司「解説」・『昔話の形態学』三六五―三八二頁、北岡・前掲論文、リクール「時間と物語」Ⅱ五八―六七頁、ジェームソン「言葉の牢獄」六五―七六頁、Peter Brooks, op. cit., pp. 14-16, 22, 39, 90-91.

- (10) 「昔話の内容の総ては、次のようないくつかの短かな文で記述できます。『両親が森に出かける、子供たちに外へ出ることを禁ずる、蛇が娘を誘拐する』など。そこで、「これらの文に見られる」述語動詞の総てが、昔話「複数」の構造「単数」をつくりあげ、主語・目的語・補語その他の文成分の総てが、「昔話の」筋を規定する。いいかえると、同一の構造が、相異なる筋の根底に、横たわりうる」（プロップ『昔話の形態学』一八四頁）。

- (11) リクールは「筋の『中間』をなす」ものとして「連続場面（シーケンス sequence）」を考える。それはプロップの「行程」に当たる。それは機能への切分化に先行し、目的論的案内役として、予備的段階、筋のやま場、遅れ、大団円といった下位グループを支配する（『時間と物語』Ⅱ六六頁）。ロラン・バルトは機能単位のクラスとして（つまり「分布」の単位として）、「物語の（あるいは物語の断片）の真の蝶番となるもの」を「枢軸機能体（fonction cardinale）（または核（noyau）」と呼び、「蝶番」機能体をへだてている物語空間を△埋める▽だけ」のものを「触媒（catalyse）」と呼ぶ。「二つの枢軸機能体をつなげるきずなは、年代順的であると同時に論理的な二重の機能性を帯びている。触媒は継起的単位にすぎないが、枢軸機能体は継起的であると同時に因果的である。実際どう考えてみても、物語活動の原動力は、継起性と因果性と混同そのものにあり、物語のなかでは、あとからやって来たものが結果として読みとられる。してみると、物語とは、

スコラ哲学が、そのものの後に、ゆえに、そのものによって (post hoc ergo propter hoc) という定式を用いて告発した論理的誤謬の組織的応用ということになろう。この定式はたしかに「運命」の銘句ともなりうるものであって、物語とは要するに「運命」の「言語」(ラング)にはかならない。そして論理と時間性とのこうした「圧縮」を表現するのが、いくつかの枢軸機能体から成る骨組みである。……それを構成するのは、見せ物性(言表された行為の重要性や大きさや稀少性や力強さ)ではなく、もしこう言ってよければ、危機である。枢軸機能体とは、物語の危機の瞬間なのだ。こうした二者択一の分岐点、こうした「転載装置」のあいだに、触媒は安全地帯を、休息を、警沢を配置する。「(物語の構造分析序説」一七一―一九頁)。「シークエンスとは、お互いに連帯性の関係によって結ばれた核の論理的連続である。シークエンスは、その諸項の一つが連帯的な先行項をもたないとき開始され、他の一つがもはや後続項をもたないとき閉止される。」「シークエンスは、どれほど重要でないものでも、少数の核(つまり、事実上は「転載装置」)で構成され、常に危機の瞬間を含む。そしてこのことがシークエンスの分析を正当化する。」「……シークエンスとは、いわば脅威にさらされた論理的単位であって、このことが最小限シークエンスを正当化する。シークエンスはまた最大限に根拠をもつ。つまり、いくつかの機能体をまとめ、一個の名称のもとに包摂するシークエンスそのものが、新たな単位を構成し、他のもつと大きなシークエンスの単なる一つの項として機能しうるものである」(「序説」二九―二八頁)。

(12) 北岡の論証するところによると、プロップの機能概念は彼が依拠する原文「アファナーシエフ民話集」(それは例毎に行為が異なる)そのものではなく、その原文の、言語学が言う「対象言語」を、多くのテキストの比較対照という学的操作に基づいて抽出したメタ概念(たとえば、加害、欠如など)に翻訳したものである。原文をミクロ・レベルとすれば、プロップの「機能の定式」に示されているのは、原文の要約(マクロ・レベル)のメタ言語による要約(北岡は「上部構造」と呼ぶ)である。リクルールが指摘しているのは、この「上部構造」をさらに記号で書き換えたものである。したがっ

て、バルトなどがある物語の具体的テキストの行為（機能）をプロップの機能と同一視しているのは、誤りである。参照、北岡誠「解説」・プロップ『昔話のは形態学』三六五—三八三頁（なお、この翻訳書には第二部に『アフアナシーエ平民話集』の当該部分と付録が付加されている）。北岡・前掲論文・大浦康介編・前掲書一九三—二〇二頁。

- (13) クロード・プレモン（坂上脩訳）『物語のメッセージ』、一九七五年（「物語のメッセージ」と「物語可能なものの論理」を所収）。文献名のない本文中の頁数は本書の頁数。ポール・リクール『時間と物語』Ⅱ六七—七五・一〇三—一〇四・一〇七・一七五頁。ロラン・バルト『物語の構造分析序説』一五・二三—二五・三三頁。
- (14) ロラン・バルト『序説』二三頁は、プレモンがレヴィストロースの△年代順的継起の秩序は、無時間的な母型構造のなかに吸収される▽という命題に賛成するだろうと言うが、プレモンは「われわれはプロップと共に、時間的継起の法則にしたがって、各連続の機能を秩序づけることが非常に重要だと考える。この相違は、おそらく対象の違いによって説明されるだろう。レヴィストロースの研究は、物語技術によって語られる神話のテーマの構造化という方向にむかっており、一方われわれの目的は、物語の技術そのものの構造化である。われわれは、文化的原典からは独立した役割の類型学を打ち立てようとしているのである。それらの役割は、文化的原典の中で（プロップの言う意味の）△属性▽を受け取っている」と（プレモン「物語のメッセージ」六三—六四頁注10）。
- (15) Claude Bremond, *Logique du récit*, 1973, p. 133. (この著書は参照できなかったので、リクール『時間と物語』Ⅱ六九頁の引用による。以下についても同様である)
- (16) C. Bremond, *op. cit.* (リクール『時間と物語』Ⅱ六九—七〇頁)。
- (17) C. Bremond, *op. cit.*, p. 134. (リクール『時間と物語』七〇—七一頁)。
- (18) C. Bremond, *op. cit.*, p. 134. (リクール『時間と物語』Ⅱ七二—七四頁)。なお、リクール『時間と物語』Ⅱ七一—七二

頁は、役割目録の完成によって「もっと進んだ形式化、もっと完全な脱年代順化、この二つのタイトルをブレモンのモデルは要求できる」と言うが、前述したように、ブレモン自身はそのような要求はせず、逆に、時間性を重要であると考えている。